ロクでなし魔術講師と記憶喪失の少女

たこやき

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私は過去の記憶を失っている。自分がどこで生まれたか、何をしてきたのかを何も知らない。覚えていたのは自分の名前だけだった。これは忘却した記憶を取り戻そうとする一人の少女の物語。

目次

記憶を失った少女 1
私について 4
出会い 8
初授業 13
私にとっての正義の味方 19
決闘 24
亀裂 31
夢 38
変化 43
大切なもの 47
欠片 52
天の智慧研究会 57
教室の死闘 63
約束 69
一ヵ月後 74
魔術競技祭 78
練習 82
前日 87

記憶を失った少女

最初に見た光景は自分の周りで倒れている人たちがおり、遠くには火の海が見えた。
「ここは……どこ？」
辺りを見渡すと、崩壊している天井や建物の柱が見えることから、どこかの建物にいることはわかった。
「私は……何でここに？」
私は今の状況を整理しようとするが、何も思い出せない。覚えているのは、自分の名前だけ。他には何も思い出せない。
「ステラ！」
自分の名前しか思い出せず、困惑している私の元に一人の男性がやってきた。
「無事だったか……よかった」
男性は私の手を握ると、安堵する。
この人は誰なのだろう。
この人は何故私のことを見て安堵するのだろう。
この人と私はどういう関係だったのだろう。
いくつもの疑念が頭の中を回っているが、その答えを見つける方法は今の私にはない。
「あなたは誰ですか？」
「何を言っている？いつもの冗談にしては笑えないぞ」
「あなたは私を知っているかもしれませんが……私は記憶がありません。だからあなたが誰なのかもわからない」
私が今の自分の状態を伝えると、男性は悲痛な表情を浮かべ、こんなのありかよとつぶやいている。
「本当に俺のことがわからないのか？」
「ごめんなさい……本当にわからないです。あなただけじゃない、何で私がここにいることもわからない……」
「それじゃあ、自分の名前は覚えているか？」
「は、はい。私はステラ。ステラ＝フィールドです」

男性は悲しそうな表情で私の頭をなでた。
「俺はグレン＝レーダス。お前の家族だ」
「私の家族？」
「ああ……今は何も思い出せないかもしれないが、俺とお前はそれと同じくらいの関係だったんだ」
この人と私は家族。何故だろう……とても大事なことなのに、何も思い出せない。
「ごめんなさい。家族といわれても……私は何も思い出せなくて」
「そうだよな……」
「ごめんなさい……」
私は目の前で悲しそうにしている男性に対して、涙を流す。
「お、おい……」
「ごめんなさい。何もわからないです。あなたのことも……自分のことも」
「……」
「あなたが私を家族といってくれているのは信じたい……でも、私にはそれを信じるだけの確証がないんです。私はどこで生まれて、どこで生きてきたかもわからない……」
私は過去の自分に関する全ての記憶を失っていた。
「そのペンダントのことは覚えているか？」
私の首には青色のペンダントがかかっていた。
「ごめんなさい……覚えてません」
「それはお前が俺にくれたものなんだよ。そのときの俺は恥ずかしくて、お前がつけろっていっちゃったけどな」
「そうだったんですか……」
大切なことなのに、何も思い出せない自分が腹立たしい。
「ごめんなさい……何も覚えてないから、そのこともわからないんです」
「今はそれでいい……お前が生きていてくれただけで」
「グレンさん……」
「やっと名前で呼んでくれたな」

初めて呼ぶ名前なのに、すごく懐かしい気がする。
「これから私はどうなるんですか？」
「そうだな……記憶喪失のお前をおいておく場所はないし、とりあえず、一緒に暮らすか」
「いいんですか？」
「いいも何も……少し前までは一緒に暮らしてただろ」
グレンさんと私が一緒に暮らしてた？
「私っていくつなんですかね……結婚はしてないと思うんですけど」
「15だ」
思った以上に自分は若かった。
「さてと……これ以上ここにいてもしょうがない。一度家に帰るか」
「そうですね」
これ以上ここにいても、何も思い出すことはないだろうしね。
「グレンさん」
「何だ？」
「これからよろしくお願いします」
「お、おう……なんか改めて言われると恥ずかしいな」
グレンさんは私から顔を隠すようにそっぽを向いた。
過去の私がグレンさんにどういう感情を抱いていたかはわからない。
それでも一つだけいえることがある。
私はこの人をとても大切に思っていたということだ。記憶を失っても、思いだけは失うことはない。
このときの私は自分の記憶が失ったことに絶望しつつも、新しい生活で希望を見つけようとしていた。

私について

その後、私はグレンさんの家にいった。
そこで私はグレンさんとグレンさんの育ての親であり私のことも知っているというセリカさんから私のことに関する話を聞いた。
私の両親は早くに魔術によって死去しており、一人っ子だった私は身よりもおらず、預けられる形でこの家に住んでいたこと。
私はここでさまざまな魔術を勉強しながら、お二人の生活のお世話をしていたこと。
私が13歳になったころにグレンさんにプレゼントをしたこと。
そして、少し前に私が何も言わずにこの家を出て行ったことを二人は話してくれた。
その話を聞いたとき、私は動揺し、すぐにこの話を受け入れることが出来なかった。
「私はどうして……」
「それは私たちにもわからない。何せ、お前は何も告げずに出て行ったからな」
「私に一体何が……」
出て行く前の私に特に変わったところはなかったと二人は話していた。
それならどうして急に私はこの家を出て行くことを決めたのだろう。
失った記憶とあの場所にいたことが何か関係しているのだろうか。
過去の自分のことは気になるけど、今はできることをやろう。そうしたら、おのずと自分のことがわかる日が来ると思った。
自分に関する記憶は名前しか覚えていなかったが、魔術に関する知識はあった。
時より、私はそのことが気になることもあったが、気にすれば、するほど頭の中が混乱したから、いつしかそのことを考えないようになった。
それから二年の月日が経過した日のこと。

「うん。完璧」
私はレンジに入っているクッキーの出来を見ると、カップに紅茶を注ぐ。
鏡の前で鮮やかな黄色の色をしている短髪の髪が乱れていないか、確認すると私はセリカさんの部屋を3回ノックした。
「お茶が入りました。セリカさん」
反応がなかったので、何かあったのだろうかと私が用件を伝えながら部屋に入った。
「お願いします。俺は働きたくないです！」
そこには何故か土下座しているグレンさんの姿があった。
「えっと……どうかしたんですか？グレンさん」
「おお。もうティータイムの時間か。今日はどんな紅茶だ？」
「はい。今日は疲労回復にきくものです。いろいろとお疲れのようなので」
「おお。ステラは気が利くな。ほら、いつまでも床に土下座してないで、ステラにこの現状を説明してやれ」
私はカップをセリカさんの机の上におくと、グレンさんのほうを向いた。
「働きたくないって……一体どういうことですか？」
「俺にアルザーノ帝国魔術学園の非常勤講師として働いてほしいんだと」
「それってすごい話じゃないですか。でも……何でグレンさんにそんな話を？」
「いい加減、こいつに働いてもらおうと思ってな」
ここ一年、グレンさんは部屋に引きこもっている状態で働いてはおらず、一日を家で過ごすという体たらくだった。
「お前からもいってやれ。いい加減働いてくださいってな」
「純粋なステラがそんなことをいうはずがない！邪道な道にステラを引き込むのはやめろ！」
「だったらお前が働ければいいことだろう。そうしたらステラも困ることはない」

二人に詰め寄られ、私はどう返事を返せばいいか困ってしまう。
「私はグレンさんがしたいようにやるのが一番いいかと……」
「ステラ!そんな甘いことを言っているから、こいつがいつまでたっても働かないんだ」
「おい……ステラはいいことをいったんだぞ。それを否定することはないだろう」
「お前のしたいようにするだと?そうしたらお前は今の生活を続けるだけだろ」
二人の話は平行線をたどっており、まとまりそうにない。
「とにかく無理だ。俺に誰かを教える資格も権利もない。大体俺は魔術が嫌いなんだ。だから、この話はなかったことに……(其は摂理の円環へ帰還せよ・五素は五素に・像と理を紡ぐ縁は乖離せよ)」
グレンさんが反論を言う前にセリカさんが早口で呪文を告げると、グレンさんと私の横を光が通り、それは壁を突き破り、夜空に消えていった。
「次は外さん」
「ひぃぃぃ!?」
こうして、セリカさんの脅しによる(?)説得により、グレンさんはアルザーノ帝国魔術学園の非常勤講師をやることになった。
グレンさんはしょんぼりしながら、部屋を出て行くと。
「まったくあいつにも困ったものだ……」
「あはは……」
「ちょうどいい。お前にも話があったんだ」
「私にですか?」
私は部屋を出て行こうとすると、セリカさんに呼び止められる。
「ああ。お前も生徒として学園に通ってもらおうと思ってな」
私が学園に通う必要はあるのだろうか。
「お前もずっとここで私から魔術を学ぶのも飽きてきただろうと思ってな」
「い、いえ……そんなことないです」
私はここにすみ始めてから、セリカさんから魔術を学び、それは普

段使えるものや基礎的なものまでいろんなものを教わった。
「それにここで一人で過ごしているよりも、同世代の友達を作ったほうがいいだろうと思ってな」
「友達……」
　ここでの生活は一人でいる時間のほうが長いから、同世代の子との付き合いはない。
「お前は過去にこだわることはせず、新しい未来を見つめ、前に歩み始めた。そのことを私たちは認めているし、間違いだとは思っていない。学園に通うことでお前にとってきっといいことにつながると私は思う。それにお前に関することも見つかるかもしれない」
「確かにそうですね」
　セリカさんの言うことは一理あった。
「わかりました。私も学園に通います」
「ありがとう。ほんと……素直ないい子に育ってくれて私は嬉しいよ」
「私はいい子ですかね？」
「いい子だよ。少なくとも、グレンよりは手はかからない。過去のお前も今のお前もな」
　セリカさんのまなざしはまるで成長している子供を見つめるやさしくて、温かみのある母親のまなざしだった。

出会い

アルザーノ帝国魔術学院。アルザーノ帝国の人間でその名を知らぬ者はいないだろう。

今からおよそ四百年前、時の女王アリシア三世の提唱によって巨額の国費を投じられて設立された国営の魔術師育成専門学校だ。

今日、大陸でアルザーノ帝国が魔導大国としてその名を轟かせる基盤を作った学校であり、常に時代の最先端の魔術を学べる最高峰の学び舎として近隣諸国にも名高い。

現在、帝国で高名な魔術師のほとんどがこの学院の卒業生である確固たる事実が存在し、それゆえに学院は帝国で魔術を志す全ての者達の憧れの聖地となっている。

その必定の流れとして、学院の生徒や講師達は自分が学院の輩であることを皆等しく誇りに思っており、その誇りを胸に日々魔術の研鑽に励んでいる。

彼ら、彼女たちに迷いはない。そのひたむきなる研鑽が、将来、帝国を支える礎になることを、自らに確固たる地位と栄光を約束してくれることを正しく理解しているからだ。

よって、この魔術学院において授業に遅刻する、サボるなどというその辺の日曜学校のような意識の低いことはまずめったに発生しない。

「うぉおおおお!?　遅刻、遅刻ぅううううッ!?」

早朝の町中にて、こんな風に全力疾走している男性を除いては……

「なんで起こしてくれなかったんだよ！ステラ」

「起こしましたよ！人が制服に着替えている間に二度寝したお馬鹿さんはどこのだれでしょうね！」

街中を全力疾走しているグレンさんの後方を私は走って追いかけている。

「すまん。俺だわ」

「ですよね！初日から遅刻するとか、伝説に残りそうです」

「お前だって、制服のことでさんざん文句を言ってたじゃないか！」

「だって、おへそが出ているんですよ！恥ずかしくて着れないです！」
「知るか！それをデザインしたやつに言え！」
　私たちはそんなやりとりをしながら、学園までの道のりを走って向かっている。
　私たちが走っていると、影のほうから、二人の学生がこちらの方向に歩いているのが見えた。
「グレンさん！人がいますからとまってください！」
「な、何ィいいッ!?ちょ、そこ退けガキ共ぉおお――ッ！」
　私は後を追いながら、必死に叫ぶが、動物が急に止まれないように人間も同じでグレンさんは彼女たちのほうにむかっていく。
「お、《大いなる風よ》――！」
　左側にいた学生ががとっさに一節詠唱で、黒魔【ゲイル・ブロウ】の呪文を唱えた。瞬時にその手から巻き起こる猛烈な突風がグレンさんの体を上空にあげていく。
「あれ――ッ!?俺、空飛んでるよ――ッ!?」
　グレンさんは天高く空を舞い――放物線を描いて――通りの向こうにあった円形の噴水池の中へと落ちた。
「だ、だいじょうぶですか？」
　グレンさんよりも先に、彼女たちに私は声をかけた。
「う、うん……私たちは」
「少しやりすぎたかな……」
　噴水にいるグレンさんに視線を向けると、グレンさんは無言で噴水から出てきた。
「ふっ、大丈夫かい？　お嬢さん達」
「いや、貴方が大丈夫？」
　なんでさわやかな笑顔で言うんですか……
「あはは、道を急に飛び出したら危ないから気をつけた方がいいよ？」
　「いや……急に飛び出して来たのは貴方だったような……」
「そうですよ……もしかしたら相手にけがを負わしていたかもしれません。本当にごめんなさい！」

私は彼女たちに頭を下げる。
「ううん。わたしたちこそごめんなさい。いきなり魔術を撃っちゃって……もしかしたらこのくらいじゃすまなかったかもだし……」
「本当にすみませんでした。どうかご無礼をお許し下さい」
私が頭を下げると、二人の学生もそれぞれに謝罪する。
「まぁ、仕方ないな！俺はちっとも悪くなくて、お前らが一方的に悪かったのは明確だけど、そこまで言うなら超特別に許してやる……ん？」
グレンさんは金髪の学生のほうに近づいていく。
頬をむにーっと引っ張り、細い肩と腰をなで回し、前髪をつまみ上げ、目をのぞきこむ。ここに警官がいたとしたら、一発で不審者として逮捕されるようなことをしている。
「あ、あの……私の顔に何かついていますか？」
「いや……お前、どこかで」
「グレンさん……」
「おい。そんな犯罪者を見るような目で俺を見るな。ステラ」
私以外でもそう思うのが常識だと思うのだが……
「アンタ、何やっとるかぁあああ――ッ!?」
銀髪の髪をした学生の回し蹴りがグレンさんの延髄を見事に捉え、グレンさんを吹き飛ばした。
「ギャァァァァ――ッ!?」
情けない悲鳴を上げてグレンさんは地面を転がっていく。
「不注意でぶつかってくるのはまだいいとして、何よ今のは!?女の子の身体に無遠慮に触るなんて信じられないッ！最ッ低！」
「ちょっと待て、落ち着け!?俺はただ、学者の端くれとして、純然たる好奇心と探究心でだな!?」
「……そうですね。いつも平気で私の着替えをのぞいてきますもんね」
「ステラさんっ!?ここで爆弾を落とす発言はやめてほしいな!?」
グレンさんが少しあれなのは知っていたけど、まさかここまでとは思わなかった。

「ルミア、警備官の詰め所に連絡。この男を突き出すわよ。やっぱりただの変態だわ」
「え!?ちょ、勘弁してください！仕事の初日からそんなんなったらセリカに殺される！マジごめんなさい！許してください！調子乗ってすんませんでしたッ！」
　年下だと思う人たちにこんなことで土下座をする大人を私は見たことがない……
「本当にごめんなさい！悪い人ではないので、今回は見逃してください」
　私は彼女たちに対し、もう一度深々と頭を下げる。
「あの……反省はしているみたいだし許してあげようよ」
「はぁ？本気？貴女って本当に甘いわね、ルミア……」
「ありがとうございます！このご恩は一生忘れません！ありがとうございます！」
　グレンさんは私の横で気丈に振舞う。
「って……時間！グレンさん！時間！」
「そうだった！こんなことしてる暇はない！急がないと遅刻する！」
　私は時計を取り出すと、現在の時刻は９時を回っていた。
「……遅刻？ですか？」
「嘘よ、そんなの。まだ余裕で間に合う時間帯じゃない？」
「んなわけねーだろ！もう、九時じゃねーか！」
　私たちは時計を取り出すと、現在の時刻を見せた。
「その時計、ひょっとして針が進んでませんか？ほら」
　金髪の女の子は同じように時計を取り出すと、私たちに見せる。時計の針が指すのは八時だ。
「……」
　しばらくの間、不思議な沈黙が両者を包み込む。
「ステラ。俺は用事を思い出した。先に行っててくれ」
「え……どこに行くんですか!?」
「急用だ」
　グレンさんはそう言ってその場を去っていった。

「逃げたわね……」
「あはは……ごめんなさい」
　私は目の前の二人に謝りつつ、苦笑を浮かべる。
「その制服、あなたもアルザーノ帝国魔術学院の生徒だよね？」
「はい。今日から転入の予定です」
「名前を聞いてもいいかしら？」
「ステラ＝フィールドです。学年は二年二組です」
「それじゃあ、私たちと同じクラスだね」
「そうなんですか？」
「ええ。これからよろしくね。私はシスティーナ＝フィーベルよ」
「私はルミア＝ティンジェル。よろしくね。ステラさん」
「よろしくお願いします。二人とも」
　こうして私はこれから学園生活を送っていくにあたって、初めての友達と呼べる人物たちとの出会いを果たすのだった。

初授業

「遅い！」

魔術学院東館校舎二階の最奥、魔術学士二年次生二組の教室。正面の黒板と教壇を、木製の長机が半円状に取り囲む構造の座席、その最前列の席に腰かけるシスティーナさんは苛立ちを隠すことなくはき捨てる。

「どういうことなのよ！もうとっくに授業開始時間過ぎてるじゃない!?」

「確かにちょっと変だよね……」

その右隣に座っているのがルミアさんでシスティーナさんの左隣に座っているのが私だ。

「グレンさん……急用って言ってたけど、さすがにこれはまずいですよ……」

時間を過ぎても、一向に現れない教師に対し、システィーナさんを筆頭に苛立ちを感じている生徒が多い。

「あのアルフォネア教授が推す人だから少しは期待してみれば……これはダメそうね」

「そ、そんな、評価するのはまだ早いんじゃないかな？何か理由があって遅れているだけなのかもしれないし……」

「そうですよ。何かしらのトラブルがあったから遅れているかもしれないですし」

遅れている教師を擁護している私とルミアさんに対し、システィーナさんは私たちに振り返ると、反論をする。

「甘いわよ、ルミア、ステラさん。いい？どんな理由があったって、遅刻をするのは本人の意識の低い証拠よ。本当に優秀な人物なら遅刻なんて絶対ありえないんだから」

「そうなのかな……？」

「確かに遅刻はまずいですよね……」

「まったく、この学院の講師として就任初日からこんな大遅刻だなんて良い度胸だわ。これは生徒を代表して一言言ってあげないといけ

ないわね……」
　本来なら、私は転入の挨拶をしなければならないのだが、グレンさんが来てから言おうと思っていた矢先、その本人が来ないので、まだ挨拶が出来ていないので、周囲のクラスメイトたちから、誰こいつ？という視線を向けられているので、すごい居心地が悪い……
「あー、悪ぃ悪ぃ、遅れたわー」
　私の心配をよそにけだるい声をと共にグレンさんが教室に入ってきた。
「やっと来たわね！ちょっと貴方、一体どういうこと!?貴方にはこの学園の講師としての自覚は―」
　システィーナさんは何かを言おうとしたが、グレンさんの姿を見て硬直した。
「あ、あああぁぁぁぁ！貴方は!?」
「……違います。人違いです」
「人違いな訳ないでしょ!?貴方みたいな男がそう居てたまるものですか！」
「人を指さしちゃいけませんってご両親に習わなかったのかい？」
　その理論でいくと私は普段からグレンさんに指を指されているんですが……
「ていうか、貴方、なんでこんなに派手に遅刻してるの!?あの状況から、どうやったら遅刻できるっていうの!?」
「そんなの……遅刻だと思って切羽詰まってた矢先、時間にはまだ余裕があることがわかってほっとして、ちょっと公園で休んでいたら本格的な居眠りになったからに決まっているだろう？」
「なんか想像以上に、ダメな理由だった!?」
　急用って公園で休んでいたんですね……なんとなく想像が出来ていた自分が少し情けない。
「えー、グレン＝レーダスです。本日から一ヶ月間、生徒諸君の勉学の手助けをさせて頂くつもりです。短い間ですが、これから一所懸命頑張っていきます。おーい。ステラ」
「は、はい！」

私はグレンさんに名前を呼ばれたことで立ち上がった。
「お前、こいつらに挨拶はしたの？」
「えっと……まだです。グレンさんがきてからしたほうがいいと思って」
「それならこっちこい。これから一緒にすごす級友にちゃんと挨拶しとけ」
「はい」
私は教壇のほうに歩いていく。私の姿を見て、クラスメイトたちが騒ぎ始める。
「ステラ＝フィールドです。今日からこのクラスに転入しました。わからないことが多いので、いろいろと教えていただけるとすごく助かります。これからよろしくお願いします！」
私は自分の自己紹介と共に頭を下げる。
「それじゃあ、ステラに関して何か質問はあるか？」
「ステラさんには後で個人的に聞くので、今はいいです。それより授業を始めてください」
「おいおい。せっかくの転入生だぜ。ひとつやふたつくらいあるだろ？」
「グレンさん……そろそろ授業を始めたほうが」
システィーナさんの怒りが頂点に達しているから、私は自分のことよりも授業を始めたほうがいいと進言した。
「あー、まぁ、そりゃそうだな……かったるいけど始めるか……仕事だしな……」
私は自分の席に戻った。
「よし、早速始めるぞ……一限目は魔術基礎理論ＩＩだったな……あふ」
あくびをかみ殺してグレンさんがチョークを手に取り、黒板の前に立つ。
私を含めて、皆が注目している中、グレンさんは黒板にある文字をかいた。
「自習」

黒板に大きく書かれたその文字を見ると、私たちは沈黙するしかなかった。
「え？じ、じしゅ……じしゅう？え？え？」
システィーナさんだけでなく、ここにいる全員がその文字に目を疑った。
「一限目は自習にしま～す。……眠いから」
クラスが沈黙する中、グレンさんは机に突っ伏すと、すぐに寝息を立て始める。
「ちょおっと待てぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!」
「システィーナさん！気持ちはわかるので、落ち着いてください！教科書を投げるのはやめましょう！」
私は腕にしがみつく形でシスティーナさんの暴挙を止める。
「離しなさい！ステラさんはあんな態度を見せられて、何も思わないの!?」
「システィーナさんの怒りはわかりますし、私も思うところはあります！今日はあんなですけど、ほんとはすごい人なので！」
「すごい人？」
「はい……もう少しだけ信じてあげてくれませんか？」
私が懇願するように言うと、システィーナさんは怒りを抑えてくれた。
グレンさんの行う授業はあまりよくないものだった。とにかく、聞いていて授業の内容が理解できない。そもそも説明になっていない。
だらだらと間延びした声で要領の得ない魔術理論の講釈を読み上げ、時々思い出したかのように黒板に判読不能な汚い文字を書いていく。
生徒達は授業の内容を何一つ理解できなかったが、このグレンとかいう非常勤講師が恐ろしくやる気がないことだけは理解できた。
「これでこの先大丈夫なのかな……」
クラスの空気が余りよくないことを察した私はこれからのことを不安に思った。
そんな中、一人の生徒がグレンさんに質問をしようと手を上げた。

「あの……先生……質問があるんですけど……」
「なんだ？言ってみな」
「えっと……この五十六ページ三行目のルーン語の一例なんですが、共通語訳がわからなくて……」
グレンさんは言われた場所のページを開き、内容を読む。そして、何かを悟ったように笑った。
「悪い、俺もわからん」
「え？」
「すまんな。自分で調べてくれ。それかステラに聞いてくれ。あいつ、こういうのは詳しいから」
グレンさんの返しに質問した生徒は呆然と立ち尽くしている。
確かに私はそういう勉強もしたから、詳しいけどさ……
「ちょっと待ってください！」
流石にこの対応に関してシスティーナさんは怒り心頭だった。
「生徒の質問に対してその対応、講師としていかがなものかと」
「だーかーらー、俺もわからんって言ってるだろ？わからないのにどうやって教えりゃいいんだよ？それにステラならわかるかもしれな言っていってるだろ」
とりあえず、私を巻き込むのはやめてほしいのだが……
「答えられないのなら、後日調べて次回の授業で改めて答えてあげるのが講師としての勤めだと思うのですが？それにステラさんにだってわからないことはあるかもだし……」
「だったら、自分で調べた方が早くね？てか、そもそも分からないからってすぐ人に聞くなよな。まずは自分で調べて、それでも分からなかったら聞くもんだ。ステラはわからないところは人に聞かずに全部自分で調べてたぞ」
私の場合は単に教えてくれる人が近くにいないことが多かったから、わからないところは自分で調べるしかなかった。
「そういう問題じゃありません！私が言いたいのは――――」
「あ、ひょっとしてお前ら辞書の引き方知らねーの？」
「辞書の引き方ぐらい知ってます！もう結構です！」

やる気を出さないグレンさんに対し、システィーナさんは怒りを抑えるように席に座る。

クラスの空気は険悪なものに変わり、グレンさんに対する評価はかなり下のほうにあり、グレンさんの最初の授業は最悪な形で終わった。

私にとっての正義の味方

私たちの次の授業は錬金術だった。

私たちが普段、着用している制服は身体回りの気温・湿度調節魔術――黒魔【エア・コンディショニング】が永続付呪（エンチャント）されているらしく、男性の制服とは異なり、その生来の外界マナに対する親和性の高さを伸ばすため、魔術の習熟初期段階では薄着ですごせる。

錬金術の実験は実際に生徒達の手で魔法素材を加工し、器具を操作し、触媒や試薬を扱う授業だ。その実験内容によっては衣服がひどく汚れたり、衣服に薬品の臭いが移ったりしてしまう場合がある。

それゆえに、私たちはこの更衣室に集い、実験用のフード付きローブに着替えている真っ最中であった。

身に着けている制服やケープ・ローブを脱ぎ捨て、上下の下着姿となったシスティーナさんはロッカーの中にそれら衣類を叩き込みながら、苛立ちをあらわにしている。

「まったくもう、なんなの!?あいつ！」

「あはは……まあまあ」

ルミアさんがあいまいに笑いながらなだめるが、システィーナさんの怒りは収まらない。

「やる気なさ過ぎでしょ!?なんであんな奴が非常勤とは言え、この学院の講師をやってるわけ!?」

「そうだね……グレン先生にはもうちょっと頑張って欲しいかも」

「そうですね……今のままだと」

クラスの空気は思った以上に最悪で今のままだと生徒の不満が爆発する日も近い。

「はぁ……確か次の錬金術の実験もアイツが監督するんでしょ？」

「うん、そうだよ。グレン先生はヒューイ先生の後任だから」

「ヒューイ先生ってどんな先生だったんですか？」

「真面目でいい先生だったわよ。すくなくともあいつよりは熱心だったわ」

「生徒思いの優しい先生だったよね」
ヒューイ先生というのはグレンさんの前にここのクラスの担任を務めていた人だ。
「ヒューイ先生の授業は凄くわかりやすくて、質問にもちゃんと答えてくれて……凄くためになったのに……何でやめちゃったかなぁ……」
少なくとも、その人がグレンさんよりも優秀であることはわかった。
その人が辞めた理由に関してはルミアさんとシスティーナさんから聞き、セリカさんからもグレンさんが講師を勤める際に前任者が退職するからという理由も聞いた。
やめた理由に関しては家の都合ということらしいが、どうも違和感を感じるのはなぜだ？
生徒からの評価もいい。勤務態度も問題なし、間違いなくグレンさんよりも上の人だ。ここは魔術に関してはトップクラスだし、自らを高める環境としてもいいはずだ。
それなのに、単に家の都合だけでやめるだろうか？何か別に理由があったんじゃないか？
いろいろと頭の中で仮説を組み立てていくが、私は途中で考えるのをやめた。
元々、その人と私は無関係なんだ。それなのに、何を気にする必要がある。
どうやら……またいつもの病気が再発したらしい…
「ステラさん？」
私が考えるのをやめると、隣にいたルミアさんが声をかけてきた。
「どうかしたの？すごく難しい顔をしているけど」
「考え事をしてただけなので、大丈夫ですよ」
「何を考えていたの？」
「今日の夕飯は何しようかなって考えていたので」
ほんとは別のことだけど、ごまかすために適当な嘘をついた。
「ステラさん……ほんとにあいつはすごいやつなの？」

「少し前まではすごい人でしたよ。いまはあんなですけど」
「前ってことは過去に何かあったってこと？」
「グレンさんは魔術が大嫌いなんですよ」
「え？嫌いなのに、何で講師をやっているの……」
「まぁ、それには断れない理由があるわけで……」
いえない。セリカさんに脅されて無理やり講師をやってますとは……
「それがあいつがすごいこととどう関係するの？」
「私が教えられることは少ないですけど、本当のグレンさんはあんなんじゃないってことです。」
「なんでそんなにグレン先生のことを信頼するの？」
ルミアさんの指摘にほかの女子も同様のことを思っているのか、不思議そうにしている。
「少し前のグレンさんは私の希望だったんですよ」
「希望？」
「はい。少し前の私はずっと後ろ向きな考えの持ち主でした。自分のことを受け入れることができず、ずっと自分の殻に閉じこもってました」
更衣室にいる皆が私の話を聞こうと静かになった。
「そんな私にとってグレンさんは希望の光だった。グレンさんが傷を負いながらも、誰かを救おうとする信念は後ろ向きな考えだった私に現実に立ち向かう勇気をくれました。あの人がいたから、私は勇気を持って前に踏み出すことができた。きっと……あの人がいなかったら、私はここにはいないと思います。」
少し前のグレンさんの姿は記憶をなくし、自分のことがよくわからないことに何度も心が折れそうになっていた私の希望だった。
傷つきながらも、誰かを救おうとするところは私にとっては正義の味方そのものだったからだ。
グレンさんのがんばっている姿を見ると、いつも勇気をもらえた。絶望に飲まれそうになる自分の心を持たせることが出来た。いつまでも後ろ向きな自分でいちゃいけないと気づくことが出来た。

「あの授業態度を見たら、不満を持つのは当たり前だし、失望しているかもしれません……でも、あの人はほんとにすごいので」
グレンさんがやる気を出す日はきっと来る。そう私は信じている。
「そんなやつとは到底信じられないわね……ステラさんとあいつはどんな関係なのよ？」
「そうですね……私たちは家族みたいなもんですかね」
これから、システィーナさんが癒しを求めて、ルミアさんの体を触ったり、間違えて女子更衣室に入ったグレンさんに対し、女性陣の容赦ない攻撃が始まったりと……いろいろあった。
そのころ、学園長室では二人の人物が話をしていた。
「まさか、彼女の娘が編入してくるとは思わなかったのう」
「勘違いしてもらったら困るが、ステラはあいつとは違うからな」
セリカはため息をつくと、窓から見える雲を眺める。
「わかっておるわい。ステラちゃんを彼女と同じようには見ないから、安心せい」
「それならいいが、ステラに母親のことは絶対話すなよ。今のあいつに悪影響を与えそうだ」
「実の母親なのに、秘密にしておくのかのう。それはやりすぎじゃないかい？」
「あいつが母親のことを知ったら、同じ道に進もうとするからな。それを防ぐためにも、仕方がないことだ」
ステラを母親と同じ道に進ませてはいかない。セリカは成長していく愛弟子を見ているうちにそう思いつつあった。
「そうじゃのう。危険だと感じながらも、自分の信じる正義を貫くために相手の喉元に食らいつく。かつて彼女の母親がそうだったように……」
「そうだな。母親は間違った道をたどってしまったが、ステラは正しい道を歩んでほしい」
「わしらにその導きができるのかのう？」
「ステラはちゃんと自分の道を探すことが出来る。この学園で仲間たちと共にな。もしも、あいつが道を踏み外すときは私たちがまた戻し

てやればいい」
　魔術の怖さや正しさを知っているステラなら大丈夫。セリカはそう確信を持っていた。
「彼女には魔術師の素質がある。前にそう言っていたかのう？」
「ああ。あいつは膨大な魔力を体に宿している。本人は力の大きさにずいぶん苦労をしているが、素質や才能で言ったら、魔術師として生きるために生まれてきたといっても過言じゃない」
「彼女を正しい道に導いてあげるのもわしらの仕事じゃな」
「ああ。この広い世界で沢山なことを経験してほしい。あいつに足りないのは信頼できる仲間と沢山の経験だからな」
　セリカの眼差しにはまるで羽を痛めた小鳥を親鳥が看護しているようにそんな優しい眼差しだった。

決闘

グレンさんが講師を務めるようになって一週間が経過した。
グレンさんの授業は主に自習が中心でたまにまじめに授業を始めたかと思うと、すぐにめんどくさい感じるようになったのか、グレンさんが黒板に教科書を釘で直接打ちつけ始めた時、とうとうシスティーナさんの怒りは頂点に達した。
その日、最後の授業となる第五限目のことである。
「いい加減にして下さいッ！」
システィーナさんは机を叩いて立ち上がった。
「だから、お望み通りいい加減にやってるだろ？」
「子供みたいな屁理屈こねないで！」
肩を怒らせ、システィーナさんは教壇に立つグレンさんにずかずかと歩み寄っていく。
「こんなこと言いたくはありませんが、私は学園にもそれなりの影響力を持つ魔術の名門、フィーベル家の娘です！私がお父様に、貴方のことを進言すれば、貴方の進退を決することもできるでしょう」
「……マジで？」
「マジです！　本当はこんな手段に訴えたくありません！　ですが、貴方がこれ以上、授業に対する態度を改めないと言うならば――」
「お父様に期待してますと、よろしくお伝え下さい！」
どんだけ講師をやめたいんですか……私はグレンさんのやる気のなさを思うと、頭が痛くなってきた。
「いやー、よかったよかった！これで一ヶ月を待たずに辞められる！ありがとう！」
「貴方っていう人は……！」
システィーナさんの忍耐は限界にたっていたのか、左手に嵌めた手袋を外し、それをグレンさんに投げつけた。
「痛え!?」
システィーナさんのなげつけた手袋はグレンさんの顔面に当たって床に落ちる。

これは魔術決闘の合図で、私とルミアさんは驚きのあまりに声が出ない。
「貴方にそれが受けられますか？」
静まり返る教室の中、システィーナさんはグレンさんを指差し、言い放った。
「お前……マジか？」
グレンさんは眉をひそめ、柄になく真剣な表情で床に落ちた手袋を注視している。
「私は本気です」
私は本格的にやばいと思い、固まっていた体を動かし、教壇に向かった。
「ストップ！ストップです！なんでそんなことになるんですか！」
「そうだよ！システィ、早くグレン先生に謝って、手袋を拾って！」
私はグレンさんにルミアさんはシスティーナさんにそれぞれ駆け寄った。
「お。ステラ……ようやくきたか。固まってるから、ロボットに見えたぞ」
「ロボットって……それよりも生徒相手の決闘はまずいですって！」
「だって、俺が申しこんだわけじゃないし」
前から思ってたけど、この人めっちゃ屁理屈だわ！
「悪いな。今回はステラの頼みでもひけねぇわ……それで何が望みだ？」
「その野放図な態度を改め、真面目に授業を行ってください」
「忘れてないよな？俺が勝ったら、こっちの要求を呑まなきゃならないんだぜ？」
「承知の上です」
「本当にいいのか？」
「それでも……私はフィーベル家の次期当主として、貴方の様な魔術を貶める輩を看過する事は出来ません！」
フィーベル家といえば、魔術の世界ではかなり大きい力を持つ家だ。

「まったく、未だにこんな古臭い儀礼を吹っかけてくる骨董品が生き残ってるとはね……いいぜ。その決闘、受けてやるよ。ちなみに俺の要求は、俺に対する説教禁止だ」
何でこうなるんだろう……決闘を行う両者を見ると、私は再び頭が痛くなった。
こうして、決闘が行われる中庭にクラス全員が移動した。
「ごめんね。こんなことになっちゃって……」
「こうなってしまった以上は仕方ありません……私たちは見守ることしかできませんから」
私とルミアさんとクラスメイト達が見守る中、グレンさんとシスティーナさんは向かい合う形で対峙していた。
勝負の形は黒魔【ショック・ボルト】だけのものでほかの魔術は禁止。
よって、勝負の分かれ目は呪文の詠唱の速さで決まる。
グレンさんは余裕があるのか、システィーナさんを挑発している。
私としたら、その態度が絶対に裏目に出ると思った。
「《雷精の紫電よ》――ッ！」
決闘が開始されると、システィーナさんの指先から放たれた輝く力線が真っ直ぐグレンさんへ飛んでいき、グレンさんは得意げな顔でそれを……受けていた。
「ぎゃあああああ――っ!?」
グレンさんはびくんッと身体を痙攣させ、あっさりと倒れ伏した。
「あはは……ある意味予想通りですかね」
痙攣しているグレンさんを見ると、私は自分の予想が当たっていたことに安堵した。
「わ、私……なんかルール間違えた？」
助けを求めるようにシスティーナさんは困ったようにこちらを見た。
「あ。間違えてませんので、大丈夫です」
「そ、そう……なら、この勝負は私の勝ちね！」
術を受けたグレンさんがよろよろと起き上がる。

「まぁいい。この決闘は三本勝負だからな。一本くらいくれてやる。いいハンデだろ？」
「そうでしたっけ!?」
「さぁ行くぞ！二本目！いざ尋常に勝負だッ！」
強引に二本目の勝負が始まった。あっけに取られるシスティーナさんの前で、今度はグレンさんが先に動いた。
「《雷精よ・紫電の衝撃以て・撃――」
「《雷精の紫電よ》――ッ！」
グレンさんの呪文が完成するより早く、システィーナさんの呪文が完成した。
「うぎょぉおおおお――ッ!?」
先ほど見た光景と同じ光景が目の前で繰り返されている。
この後、グレンさんは強引に勝負の回数を増やしていくが、結果は同じだった。
システィーナさんの一説に対し、グレンさんは3説で唱えている……あれじゃあ、やる前から結果が見えている。
「お、おい……ステラ」
「は、はい……」
5回目の勝負が終わったあと、私は倒れているグレンさんのもとに駆け寄った。
「選手交代だ。後は頼む」
「えっ!?これって決闘ですよね!?」
「俺の代わりってことで。これ以上続けたら、何かに目覚めちゃいそう」
決闘で選手交代するなんてきいたことないんですけど……。皆のグレンさんを見る目が明らかに駄目なやつとして見ているのがわかる。
「ステラさんに交代するんですか……ステラさんはあなたのことを慕っているようですが……私にはステラさんの話を聞いても、あなたをそれだけの人物だと信じることはできません」
「い、いくらでも言え。勝負はステラにの手にゆだねられた」

これほどやりたくない決闘は初めてだよ。
「一回だけですからね。後は知りません」
「一回でいいんだ。そうしたら俺の勝ちにもっていける」
「どうなっても知りませんからね……」
グレンさんがよろよろと立ち上がると、私に近づき、耳打ちをする。
「お前のことだ。あいつの動きを全部見てて、分析もしたんだろ？」
「一応考えはまとめてありますけど、実践だとイメージと違うかもしれません」
「まとめてあるなら大丈夫だ。行ってこい」
「はぁ……」
グレンさんに手のひらで軽く背中をたたかれる。
「本当にごめんなさい……一回だけみたいなので……この回数だけ私が代理ということで」
「いいわよ。ステラさんの実力がどんなものか見たかったし」
これまでのことで感じたことはシスティーナさんはかなり優秀な人で、魔術も知識も私よりも上なのかもしれない。
「ふぅ……」
自分を落ち着かせるように、小さな息を吐いた。焦らないように、自分の頭に両手を当てて、目を閉じる。集中力を高め、最高のコンディションにもっていく。
「《雷精の紫電よ》――ッ！」
「《雷精の》」
決闘が再開されると、両者が打ち出す呪文を詠唱し始まる。
「きゃっ!?」
私のほうが詠唱が早く、雷撃はシスティーナさんに直撃したし、さっきまでのグレンさんと同じように地面に倒れる
クラスメイトたちは勝負の結果を受け、静まり返っていた。
「さすがステラ。無駄に早口言葉が得意なだけある」
「無駄っていうのやめません……」
勝負が決まると、グレンさんはぼろぼろの格好で拍手を送っている。

「な、なんでよ！私のほうが早かったはずなのに……」
倒れこんだ状態でシスティーナさんが私を見る。
「ごめんなさい。私、術の詠唱の速度には自信があるんです。それにさっきの決闘を見ている間に、システィーナさんが一説詠唱を唱える時間やタイミングなどをいろいろと頭の中で分析してたので」
「分析って……あの短い時間で!?」
「そういう部分に関しては得意なほうなので……」
私は魔術を学んでいる間に相手の動きをよく観察するようになった。
相手がどう動くのか、どのタイミングで術を撃つのか。術の詠唱の速度や力はどれくらいなのか、全てを見た後に自分がどうすれば相手に勝てるのかそれを考えるようになった。
今回の場合は単純に魔術のスピードで決まる勝負。だったら、システィーナさんより早く撃ってしまえばいい。幸いなことに勝負の前にグレンさんとの決闘でシスティーナさんの動作は見ることが出来た。
システィーナさんの動作よりも早く撃ち出すには一節での詠唱が必要。それも彼女よりも早く撃ち出さなければ負けてしまうものだった。
「それなら……私はステラさんを超えるだけの……」
「たぶんですけど、何度やっても結果は同じです。さっきも言いましたけど、私は術の詠唱の早さには自信があります。例え、私を超える速度で出したとしても、私はその上を行くと思うので……それに対策も出来ている状態で私と勝負を続けるのも時間の無駄かと……」
「くっ……」
それに勝負は一回きりという約束で私はこれ以上争いごとはしたくない。
「これで勝負は俺たちの勝ちだな」
「はぁっ!?だって私が負けたのは一回だけなんだけど！」
「いっただろ。選手交代って。それにステラの言うとおり、何度やっても結果は変わらないと思うぞ」

屁理屈を重ねるグレンさんにシスティーナさんの怒りを通り越してあきれているように見えた。
「納得していないようだから、引き分けでいいぞ」
「もうそれでいいわ……」
「システィーナさん……」
その後、自習といってグレンさんはその場を去っていった。
クラスメイトはそれぞれにグレンさんに対する不満を口にすると、その場を去っていき、残ったのは私とシスティーナさんとルミアさんの3人だけだった。
「ごめんなさい……やっぱり私が介入しなければよかったですかね」
「いいえ……ステラさんは悪くないわ。悪いのはあの教師なのだから……」
システィーナさんは怒りを抑えるように言葉を吐き出す。
「それにしても、ステラさんすごいね。あれだけ早く詠唱できる人、始めて見たよ」
「それだけの練習はしてきましたからね。」
今日のことでまたクラスメイトたちの反発は強くなった。
私は何も起こらないことを祈るしかなかった。

亀裂

校内でのグレンさんの評価は最低なものだった。真面目に授業を行わない、魔術師としてありえない行動。ろくでもない大人というもの。

あの決闘騒ぎから数日が経過し、いつものようにグレンさんは遅れて授業にやってきた。いつもならシスティーナさんが文句を言うのだが、最近ではもうそれもない。

クラスの皆はもうグレンさんには期待しておらず、各自に自習に励んでいる。

いつものように昼寝を始めるグレンさんに一人の女子生徒が近づいていく。

「あ、あの……先生。今の説明に対して質問があるんですけど……」

その生徒は少し前にグレンさんに質問をした生徒だった。

「なんだ？言ってみろ？」

「えっと……その……この呪文の訳がよくわからなくて……」

そう言って教科書を見せてくる生徒に、グレンさんは溜息を吐き、辞書を渡し、私のほうを見る。

「ほい、ルーン語辞書な」

「……え？」

「三級までのルーン語が音階順に並んでるから。あ、音階順ってわかるよな？それでもわからなかったら、ステラに聞いてくれ」

「前も思ったんですけど、私を巻き込まないでほしいんですが……」

「でもめちゃくちゃ詳しいだろ」

「確かにそうですけど……」

私はグレンさんの便利道具じゃないんだけどな……そう思っていると、システィーナさんが立ち上がった。

「無駄よ、リン。その男に何を聞いたって無駄だわ。その男は魔術の崇高さを何一つ理解していないわ。むしろ馬鹿にしてる。そんな男に教えてもらえることなんてない」

「で、でも……」

「大丈夫よ、私とステラさんが教えてあげるから。一緒に頑張りましょう?あんな男は放っておいていつか一緒に偉大なる魔術の深奥に至りましょう?」
私も立ち上がり、生徒のほうに歩を進める。
「私もお手伝いします。どこがわからないですか?」
「いいの?」
「いいですよ。自分の復習にもなりますし」
システィーナさんは笑っている。とりあえず落ち着いたかなとほっとしていたときだった。
「魔術って……そんなに偉大で崇高なもんかね?」
ぼそりと、グレンさんが私たちに聞こえるような声でつぶやく。
「ふん。何を言うかと思えば。偉大で崇高なものに決まっているでしょう?もっとも、貴方のような人には理解できないでしょうけど」
刺々しい物言いでばっさりとシスティーナさんは切り捨てた。
「何が偉大でどこが崇高なんだ?」
いつものグレンさんなら特に気にすることもないことなのだが、今日は違う。
「……え?」
グレンさんの反応に私たちは戸惑っている。
「魔術ってのは何が偉大でどこが崇高なんだ?それを聞いている」
「そ、それは……」
「ステラ、お前にも聞いてる。答えてくれ」
魔術が崇高な理由は思い当たる限りでは少ないが、私は思いついたことを口にすることにした。
「この世界の心理を解き明かすための手段……ですかね」
「ほう……」
「ほら。ステラさんはあなたと違って、魔術の偉大さや崇高な物なものに気づいているわ」
「じゃあ、それって何かの役に立っているのか?」
「え?」
「魔術が何かの役に立つのか?」

確かに魔術が何かの役に立つことは少ない。
「魔術は……人々の役に立つとか、立たないとかそんな次元の低い話じゃないわ。魔術は、人と世界の本当の意味を探し求めるもので……」
「でも、なんの役にも立たないなら実際、ただの趣味だろ。苦にならない徒労、他者に還元できない自己満足。魔術ってのは要するに単なる娯楽の一種ってわけだ。違うか？」
システィーナさんの論理は正しい、一方でグレンさんの意見も正しい。
「悪かった、嘘だよ。魔術は立派に人の役に立っているさ」
「……え？」
グレンさんの突然の意趣返しにシスティーナさんはもちろん、固唾を呑んで私たちの様子を見守っていたクラスの生徒一同も目を丸くする。
「あぁ、魔術は凄ぇ役に立つさ……人殺しにな」
私は始めてグレンさんが怖いと感じた。それくらいに表情が恐ろしかったからだ。
「剣術で人を一人殺してる間に、魔術は数十人を殺せる。戦術で統率された一個師団を魔導士の一個小隊は戦術ごと焼き尽くす。ほら、役立ってるだろ？」
「ふざけないでッ！魔術はそんなんじゃない！魔術は――」
「お前、この国の現状を見ろよ。魔導大国なんて呼ばれちゃいるが、他国から見てそれはどういう意味だ？帝国宮廷魔導士団なんていう物騒な連中に毎年、莫大な国家予算が突っ込まれているのはなぜだ？」
その理由は答えなくても、ここにいる全員がそれを理解している。
「グレンさん。言いたいことはわかりましたから、そのくらいで……」
「いいや。最後まで言わせてくれ。それにお前がそうなったのも魔術が原因かもしれないだろ？」
「それは……」
私はそれはないですとは言い切れなかった。
「お前だって本当はわかっているだろ。魔術の怖さを魔術がもたらす

意味を……」
「わかってます……でも、私は！」
「自分の運命から逃げないために魔術を選んだ。それは正しいことなのか？」
「それは……」
　私の選択は間違ってない……間違っているはずがない。
「俺は魔術で多くを失ったお前がいていい世界だとは思わない」
「それでも……私は」
「たくっ……俺はお前らの気が知れねーよ。こんな人殺し以外、なんの役にも立たん術をせこせこ勉強するなんてな。こんな下らんことに人生費やすなら他にもっとマシな」
　グレンさんが言葉を言い切る前にと乾いた音が響いた。歩み寄ったシスティーナさんが、グレンさんの頬を掌で叩いた音だ。
「違う……もの……魔術は……そんなんじゃ……ない……もの……」
　気付けば、システィーナさんはいつの間にか目元に涙を浮かべ、泣いていた。
「なんで……そんなに……ひどいことばっかり言うの……？大嫌い、貴方なんか」
　そう言い捨てて、システィーナさんは袖で涙を拭いながら荒々しく教室を出て行く。後に残されたのは圧倒的な気まずさと沈黙だった。
　グレンさんはガリガリと頭をかきながら舌打ちする。
「あー、なんかやる気出ねーから、本日の授業は自習にするわ」
　グレンさんはそう言って教室を出て行った。
「ステラさん……グレン先生が言っていたことはどういうことなの？」
　ルミアさんは悲しそうな眼差しを私に向けている。
「話さないと駄目……ですか？」
「辛いなら話さなくていいよ。でも、私たちは同じ教室で学ぶ仲間。ステラさんのことを理解したいから」
　クラスの大半は私のほうを向いている。どうやら話さないといけないらしい。

「わかりました」
　私はグレンさんの代わりに教壇に上がると、皆のほうを向いた。
「私は生まれてから、１５歳までの間の記憶がないんです」
「それって記憶喪失ってことか？」
「そうです。私が覚えていたのは名前だけ。生まれてから、１５才までどこで生活してきたか、どんな両親がいたのかもわからない。１５のときに記憶を失い、それから二年の間はグレンさんの家でお世話になってました」
「つまりここ二年の記憶はあるってこと？」
「はい。ここ二年の記憶はあります。ないのは生まれてから、１５歳までの記憶と自分のこと。後は自分が関わった周りの人に対する出来事や記憶もなく、記憶をなくしてからは自分のことも他人のことも何もわからない状態でした」
　私はクラスメイトたちからの質問に対し、状況を丁寧に伝えていく。

「お世話になっている人の話によると、私の家族は魔術によって亡くなったらしいです。私の今の状態も魔術によるものが高いって言われてます」
「それって儀式的なもの……それとも」
「それは私にもわかりません。絶対にそうだという確証がありませんから」
　私が記憶を失った原因の一つと考えられているものが魔術による記憶の封印。
「そんな私を何も言わずに家族として扱ってくれたのがグレンさんでした」
「前にステラさんが先生との関係を家族と言ってましたわね……そのときは気にしませんでしたが、そんあ大きな意味があったなんて……」
「私には本当の家族の記憶がありません。だから……グレンさんのことを家族と言ったのは私にとってそれくらいの価値があるものだか

らです」
　記憶のない私を家族として二人は受け入れてくれた。
「私は大事なものを確かに魔術で失いました。家族も大事な記憶も……何もかも魔術で失った。本来なら足を踏み入れる場所じゃないのかもしれない」
「それならどうして？」
「自分の運命から目をそむけたくないからです」
　私には魔術師としての才能がある。生きていくだけの素質は充分にあるとセリカさんからもいわれた。
「私にはこの世界で生きていくだけの才能や力もある。グレンさんが言っていたように人を殺す力も私にはあるかもしれない……」
「才能や素質があるなら……なおさらじゃないか」
「でも駄目なんです……魔術はそんなことに使っちゃいけない。魔術は人と人をつなぐもの……人殺しになんかに使えない」
　自分の力で人を殺める……そんなことは絶対にあってはならない。
「今の私は一人じゃ何も出来ない……それくらい弱い人間。だから皆さんと一緒に勉強することで何かしらを見つけたいと思った。それは強さや魔術だけじゃない……本当に大切なものを見つけたいと思った」
「私たちと一緒に……」
「はい。私は皆さんと一緒ならきっと自分にないものが見つけられる。そう思ってます。そして、私と皆さんがグレンさんの希望になれると」
「私たちが先生の希望……」
「過去の私が絶望し、後ろしか見ていなかったときにグレンさんは背中を支えてくれた。だから今度は私があの人の背中を支えてあげたい。魔術が嫌いなら、好きだと感じさせるような、魔術のことを認めてあげられるようなそんな存在になりたいんです」
　話している途中で私は泣いていた。感情が抑えられず、涙があふれていた。
「私の話は以上です。皆さんが今後どう判断するかは皆さんに任せま

す」
私は袖で涙をぬぐうと、教壇を降りると、ルミアさんが近づいてきた。
「ごめんね……何も気づいてあげられなくて」
「大丈夫ですよ。私がそういう風に振舞っていただけでルミアさんは悪くないです」
記憶のことはセリカさんからはなるべくいわないように進言されていた。
本当なら黙っていたほうが正解なのかもしれないが、私は話した。
話すことでお互いに分かり合えると言ってくれる人がいたから、この人たちから信じられると思ったから。
「今の話、システィにもしてあげてね」
「それはかまいませんけど……システィーナさんが今どこにいるかわかりません……」
学園内にいる可能性は低い。すでに学園の外に出ている可能性もある。
「多分家だと思う。家の場所を教えるから、行ってあげて」
「わかりました」
私は授業が終わると、ルミアさんの書いてくれた地図を手にシスティーナさんの家に向かった。

夢

私は学校を出ると、ルミアさんが書いてくれた地図の通りにシスティーナさんの家に向かったのだが……

「デカイ……」

私は家の大きさに圧倒されていた。うちの屋敷もそれなりに大きいが、ここはそれ以上だった。

家の大きさに圧倒されつつも、私は用件を済ますために震える手でチャイムを鳴らし、応答した方に自分がシスティーナさんの級友であることを伝えた。

家の中から私の対応する人が出てくると、こちらでございますと家の中に案内され、システィーナさんの部屋の場所を教えてもらった。

「緊張する……」

システィーナさんの部屋の前で私は緊張していた。私の話を聞いて、受け入れてもらえるだろうか……また泣かれたりしないだろうか……そんな不安が頭にあった。

「話さなきゃいけないことなんだ……」

私は頬を二回叩いて、緊張をほぐすと、部屋を3回ノックした。

「……誰？」

中からは弱弱しい声が聞こえた。

「ステラです。中に入ってもいいですか？」

「ちょっと待ってて……」

中から元気のない声と共に物音が聞こえた。それから少し経つと、中に入っていいといわれた。

「失礼します」

私はそういって中に入ると、部屋は綺麗に整頓されており、部屋の真ん中に位置するベットにてシスティーナさんは座っていた。

「本当にステラさんなのね……何しにきたのよ」

「私の話を聞いてもらおうとおもって」

「あの先生と同じことをいうなら無駄よ。私は論破されたりしない」

「誰も同じ話をしますとはいってません。私の話はグレンさんとは違

いますから」
　システィーナさんが攻撃的な視線になったことで私はあわてて違う話をしにきたことを伝えた。
「クラスの皆にはさっき話してきて、ルミアさんからもシスティーナさんにもちゃんと話したほうがいいといわれたので」
「そう……それで何の話なのよ？」
「グレンさんがいってましたよね、私のこと。そのことです」
「そういえば……いっていたような」
　私は話をまとめるために頭で会話の流れを考えてから、話し始める。
「私は15歳のときまでの記憶が一切ないんです」
「何を言っているの？」
「驚かれるのも無理はないです。今まで私はそういう振る舞いをしてきませんでしたからね。でも、これは事実です。私は生んでくれた家族の名前や顔もわからない。それまでどう生きてきたのかもわからない」
　クラスの皆が驚いていたように、システィーナさんも驚いていた。
「お世話になっている人に自分の家族が魔術で死んだと聞いたときは怖かった。自分が魔術を扱えることが恐怖でしかなかった」
「それでもステラさんは魔術を学んでいる……どうして？」
「私の記憶もきっと魔術的なものでなくなった。だったら……魔術を極めることでその記憶を取り戻すことが出来るかもしれないって思うようになったからです」
「もしも……取り戻せなかったらどうするのよ」
「そのときは……大事なものをまた見つけるだけです。私は家族や記憶といったものを失ったけど、その分大事なものも生まれた。失っても……希望があればまた前に進める。足を止めることなく歩き続けられる」
　記憶や家族を失ったものから逃げなかった理由は自分の運命から目を背けたくなかったからだけど、希望があったからこの道に進むことが出来た。

「システィーナさんが魔術をどれだけ誇りに思っているかは見ればすぐにわかります。それに比べて、私なんて、道端を歩いているありさんです」
「ありさんって……」
「小さくて、醜くて、一人じゃ何も出来ない小さなありさん。何度も何度も踏みつけられられていくんですよ」
「そうね。でもそこからまた立ち上がるんでしょ？」
「はい。私は踏みつけられても、立ちます。未来につながるものがある限り、何度でも……」
　普通ならありは一度踏みつけられたら死んでしまう。
　今の私はそれくらいの生き物。一人では何も出来ないし、今までも踏みつけられることで失ったものがある。
　それでも、私は立ち上がる。どれだけ踏みつけられても、立って歩き続ける。
「私、ステラさんのことを誤解してたかも」
「え？」
「最初はあいつの言いなりに動いてて、前の話もあいつを信じているから話してくれたのだと思ってた。でも違った……ちゃんとステラさんには考えがあって、ちゃんと意思があって、今もこうして自分のことを話してくれてる。本当は話したくないことだって思ってるはずなのに……」
「私は皆やシスティーナさんを信じたい。皆と一緒に成長したい。だから……自分の過去なんていくらでも話します」
　今行動しているのは、グレンさんのためじゃない。あくまで私のためで、私が皆に受け入れてもらうためには自分の秘密を話すしかなかった。
「私たち、案外仲良くなれるかもしれないわね」
「そうかもしれませんね」
「先生もステラさんのように何かあったのかもしれないわね……」
「それは本人に聞いてもらったほうがいいと思います。私が話すのも限界があるので」

グレンさんのことは私もよくわからない部分がある。だから、私が話すよりも、本人が話したほうがいいと思った。
「ステラさんはその……グレン先生のことが好きなの？」
「ふぇ？」
「だって、普通に考えて好きじゃないと……ここまで尽くせないでしょ？」
考えてみればそうだ……今までグレンさんのことは家族として見てきたから……そこまでの認識はなかった。
「どうでしょう……好きというよりは大事な人という思いのほうが強いです」
「それが好きってことなんじゃないの？」
「うーん。よくわからないです……」
グレンさんのことは好きか嫌いかで聞かれたら前者だ。ただ……システィーナさんのいう好きの意味は異性としてという意味がこめられている。
「ステラさんはメルガリウスの天空城って知ってる？」
「名前くらいですね」
「昔ね、私のお爺様がよく城の話をしていたの。お爺様が魔術を始めたきっかけは城に足を踏み入れて、全容を見たかったんだって。それが自分の夢だったからって、よく言っていたわ」
「おじいさまの夢は叶ったんですか？」
システィーナさんは首を横に振った。
「結局は夢物語に終わったわ。おじいさまはあきらめてしまったけど、私はいつか立派な魔術師になって、あの城の秘密を解き明かしてみせる。それが私の夢だから」
「なんかいいですね。そういうの」
自分があきらめてしまった夢を孫が受け継いでくれる。それだけでも、かなり幸せなことだと思うから。
「ステラさんは何か夢とかないの？」
「私は魔術で人と人をつなげられたらいいなって思ってます」
「どういう意味？」

「私は魔術でいろんなものを失った。本気で魔術が怖いと感じた。でも……逃げずに自分の運命に立ち向かったからこそ、自分の弱さを克服することが出来たし、こうして皆さんと出会えた。魔術で人を導いていける、人と人をつなげられる。そんな風に私はなりたいです」
魔術には残酷な面もある。時には人を傷つけることもある。
でも、魔術にはいろんな可能性があり、人を導く力がある、人をつなぐことが出来る。その夢はきっと険しい道のりになるだろうけど、私はそういう魔術師になりたい。人を幸せに出来るようなそんな人間になりたい。
「ねぇ……呼び捨てで読んでもいい？なんか親近感が沸いてきた」
「いいですよ。私もそう感じてますから」
「ふふ。私たち、数日前に知り合ったばかりなのにね」
「そうですね。いろんなことがありましたけど、私はシスティさんのことは嫌いじゃないです」
「私もステラのことは嫌いじゃないわよ。真面目で優しくて……あいつに利用されていないか心配になるところはあるけど」
「それは勘弁したいです……」
お互いに笑いあいながら、話している今の時間がとても幸せに感じる。
私はこの学園に来て正解だったと思う。一人のまんまだときっとこんな思いをすることはなかったとおもうから。
私はこの時間をずっと大事にしたい。皆とグレンさんと一緒にすごす時間。それは私にとって、何よりも大事なものだから。

変化

翌日、グレンさんは授業開始時間前に教室に来ると、システィさんに謝った。
「え？」
システィさんはグレンさんが急に謝ってきて驚いていた。
「まぁ、その、なんだ……大事な物は人それぞれって言うか、俺は魔術は大嫌いだが、その……お前のことをどうこう言うのは筋が違うって言うか……やり過ぎたっつーか、大人げねえっつーか……結局、えっと、なんだ、あれだ……とにかく悪かった」
「えっと……ステラ。これって……」
「本人なりにいろいろと考えたらしいです」
「そう……」
システィさんはまだ戸惑っているようなそんな表情をしていた。
グレンさんは謝り終えたつもりなのか、教卓へと向かい、授業を始める合図をする。
そこからのグレンさんは今までのやる気のなさが嘘のような講義を始めた。
ショック・ボルトの説明から始まり、態度や口調は今までどおりなのだが、明らかに何かが違った。
「おい。ステラ」
「は、はい！」
「悪いが、ショック・ボルトを4節で唱えてくれないか？」
普通なら、ショック・ボルトは3節で唱えることで発動する魔術。
「ふ。自分じゃ自信がないから、信頼する生徒に任せるということですか」
「俺より、こいつにやってもらったほうがいいと思ってな。それにこいつは4節でどうなるかを理解している」
「ステラさん。その魔術は何かしらの形で失敗しますわ！唱えないほうがよろしくてよ！」
後方のツインテールの子。確か名前は……ウェンディさんが私に

忠告する。
「大丈夫ですよ。少なくとも怪我をするようなことは起きません」
「本当に大丈夫なの？」
「ま。見ててください」
　周囲の心配をよそに私は４節での詠唱を唱え始める。
《雷精よ・紫電の・衝撃以て・撃ち倒せ》
　４節で詠唱されたショック・ボルトは黒板のほうにまっすぐ飛んでいき、あたる寸前で右に進路を変えた。
「答えは右に曲がる。ですよね？」
「正解だ。じゃあ、５節で唱えるとどうなる？」
《雷・精よ・紫電の・衝撃以て・撃ち倒せ》
　５節での詠唱は普段のショック・ボルトとは射程が小さいものだった。
「射程が落ちます」
「あたりだ。なら最後にこれもやってもらおう」
　グレンさんは黒板に書かれている《雷精よ・紫電　　以て・撃ち倒せ》の詠唱の一部を消した。
《雷精よ・紫電　　以て・撃ち倒せ》
　これも通常のショック・ボルトとは違い、出力が落ちていた。
「出力が落ちます」
「お見事。さすがステラ」
　クラスメイトたちは目の前の光景に目を白黒させていた。
「まっ。極めたっていうならこれくらいはできないとな」
「もしかして……ステラさんを指名したのも、彼女ならできると踏んだ上でのことですか？」
「ああ。こいつにはずいぶん前に教えたし、教えたことはちゃんと覚えているやつだからな。だから失敗することはありえないと思った」
　グレンさんはチョークを指で回しながら、私のほうを見て笑っている。
「魔術ってのは超高度な自己暗示だ。呪文を唱えるときに使うルーン語ってのは自己暗示を最も効率よく行える言語。人の深層意識を変

革させ、世界の法則に結果として介入する。お前らは、魔術は世界の真理を求める物なんていうけどな、そりゃ間違いだ」
　言葉を言い切ると、グレンさんは自分の胸を叩く。
「魔術ってのは人の心を突き詰めるもんなんだよ」
　その言葉にクラスメイトたちは驚愕をあらわにする。
「信じられないって顔だな。じゃあ、証拠を見せてやる。……おい、白猫」
「し、白猫って私のこと!?私にはシスティーナって名前が……」
「愛している。一目あったときからお前にほれていた」
「は?……な、……なななな、貴方、何を言って――ッ!?」
　グレンさんからの告白に、システィさんは顔を真っ赤にする。
「はい、ご覧の通り、白猫は顔を真っ赤にしました。見事、言葉が意識に何らかの影響を与えた。制御できる表層意識でもこの様だ。理性のきかない深層意識なんて……おい！教科書を投げるな！ステラも呆然としていないで、この馬鹿をとめてくれ！」
「馬鹿はアンタよ！この馬鹿馬鹿馬鹿！」
　システィさんはグレンさんの嘘の告白により恥ずかしくなって、持っていた教科書を投げた。
　私はこの光景を見て、呆然としていた。
「まぁ、とにかくだ。魔術にも文法や公式があるわけだ。深層意識を望む形に変革させるためのな。要は連想ゲームだ。白猫と聞けば、猫を思い浮かべるだろ」
「ちなみにステラだと何を連想する？」
　何で対象が私なんですかね……
「小さくて、可愛いから、リスね」
「ウサギだな」
「子犬……かな」
　クラスメイトから動物と見られているのがわかった瞬間だった……しかも、システィさんの言ったリスは絶対に違うと思うんだけど、私が変に深読みしているせいなのかな……
「こんな感じにステラと聞いたら、真っ先に小動物みたいだと誰もが

連想するように呪文と術式の関係も同じだ」
　その例えに私を使う意味はあったんですかね……
「つまり、呪文と術式に関する魔術則……文法と公式の算出方法こそが魔術師にとっては最重要なわけだ。なのに、お前らと来たら、この部分をすっ飛ばし、書き取りだの翻訳だの、覚えることばっか優先しやがって。教科書も「とにかく覚えろ」と言わんばかりの論調だしな。呪文や術式を分かりやすく翻訳して覚えやすくすること、これがお前らの受けてきた分かりやすい授業であり、お勉強だったってわけだ。……もうね、アホかと」
　グレンさんは私たちを馬鹿にするように鼻で笑う。
「その問題の魔術文法と魔術公式だが、全部理解しようとしたところで、寿命が足らん。だから、お前らには基礎中の基礎、ド基礎を教える。これを知らなきゃより上位の文法の公式は理解不能だからな。これから俺が説明することが出来れば……そうだな。こんなこともできる」
　手のひらを横に向け、そして、グレンは言う。
「《まぁ・とにかく・痺れろ》」
　三節の適当な呪文を唱えた瞬間〝ショック・ボルト〟が放たれた。生徒たちは適当な呪文で魔術が発動したことに対し、目を白黒させている。
「あれ？思ったより威力が弱いな……まぁ、いい。こんな風に即興でこの程度の呪文なら改変することはできるようになるからな。大抵精度は落ちるからおすすめはしないがな」
「今のお前たちは単に魔術が使えるだけの魔術使いだ。魔術師を名乗りたければ、自分に何が足らんのか考えろ。じゃ、そのド基礎を今から教えてやるよ。興味ない奴は寝てな」
　明らかにグレンさんが変わり始めている。ここにいる全員がそれを感じ始めていた。

大切なもの

グレンさんが授業を終えると、クラスメイトたちは放心していた。
「なんてこと……やられたわ」
システィさんが顔を手で覆って深くため息をついた。
「まさか、あいつにこんな授業ができるなんて……」
「そうだね……私も驚いちゃった」
隣に座るルミアさんも目を丸くしていた。
「私は信じてましたよ。いつかこの日が来るって」
「悔しいけど……認めたくないけど……あいつは人間としては最悪だけど、魔術講師としては本当に凄い奴だわ……人間としては最悪だけど」
「あ、あはは、二回も言わなくたって……」
大事なことなんですね。わかります。
「でも……あいつ、なんで突然、真面目に授業する気になったのかしら？　昨日はあんなこと言っていたのに……ステラ、何か知らない？」
「さぁ。私よりルミアさんのほうが知ってると思いますよ」
何気なくルミアさんに目を向ける。
「ルミア……貴女、どうしてそんなに嬉しそうなの？なんか笑みがこぼれてるわよ？」
「ふふ、そうかな？」
「絶対なにかありましたよね……」
私たちはルミアさんのほうを見る。
「それよりも私はシスティとステラさんがすごい仲良くなっていることに驚いてる」
「当然よ。私たちは友達なんだから」
「そうですね。私たちは友達です。なので仲良くするのは当たり前です」
友達だから仲良くするのは当たり前だし、その理論は間違っていないと思うから。
その日からグレンさんの評判は変わった。今までの駄目講師とい

う評価から一転し、グレンさんの授業は多くの学院の生徒から人気となり、それから少し経つ頃には教室に授業を立ち見に来る生徒が増えていた。
講師の中にも、今までの授業に疑問を持つものも現れ始め、また若く熱心な講師の中にはグレンさんの授業に参加して、グレンさんの教え方や魔術理論を学ぼうとするものまでいた。
もっとも、本人はこんなことを気にすることもなく、いつものようにやる気がなさそうにしているけどね。
「魔術には汎用魔術と固有魔術（オリジナル）の二つがある。お前らは誰でも使える汎用魔術を馬鹿にし、魔術師にとってオンリーワンである固有魔術（オリジナル）を神聖視している。だが、固有魔術（オリジナル）は俺のような三流魔術師にだって作れる。大事なのは自分一人で術式を組み、かつ、それら汎用魔術の完成度をなんらかの形で超える必要があるってことだ。じゃねーと固有魔術（オリジナル）の意味がないからな」
グレンさんの言ったことをメモを取り、クラスメイトは真剣に授業を受ける。
「一方、汎用魔術は見ての通り隙も改良の余地もない。それもそうだ。大昔に、お前等の何百倍も優秀な何百人もの魔術師たちが、何百年も掛けて、少しずつ改良・洗練させてきた代物なんだからな。それを独創性がないだの、古臭いだの……もうね、お前らアホかと」
チョークで黒板の魔術式を突きながらグレンさんはにやりと笑う。
「この領域の話になってくると、センスや才能の問題になる。だが、先達が完成させた汎用魔術の術式をじっくり追っていくことには意味がある。自身の術式構築力を高める意味でも、ネタかぶりを避ける意味でもな。将来、自分だけの固有魔術（オリジナル）を作りたいって思っているなら、なおさらだ」
グレンさんが懐から取り出した懐中時計を見る。
「……時間だな。じゃ、今日はこれまで。あー、疲れた……」
授業終了を宣言するとクラスに弛緩した空気が蔓延し始める。グレンさんは黒板消しをつかんで、黒板に書かれた術式や解説をおもむ

ろに消し始めた。
「あ、先生待って！　まだ消さないで下さい。私、まだ板書取ってないんです！」
　システィさんが手を上げる。すると、グレンさんは露骨にニヤリと意地悪く笑って、腕が分身する勢いで黒板を消し始めた。
「あー!?」
「ふはははははは――ッ！もう半分近く消えたぞぉ!?ザマミロ!?」
「子供ですか!?貴方はッ！」
　あはは……ああいう性格は元のままなんだよね。
　システィさんとルミアさんのやり取りを横で眺めながら、私はグレンさんはこのままでいいと思った。
　そして、放課後のこと。私とルミアさんとシスティさんは図書室に集まっていた。
「まったくもう。あの先生は……」
「まぁまぁ……最初のころと比べると、授業もかなりましになってきましたし……」
　憤慨しているシスティさんの横で私は苦笑を浮かべる。
「ステラ。あなたはあの先生に甘すぎ。もう少し厳しくしないと」
「そうですかね？」
「そうよ。先生がステラに頼っているのもきっと甘えているからなのよ」
　グレンさんから甘えてもらう……うーん。あんまり想像できない。
「私もステラさんのことを呼び捨てでよんでいい？」
「いいですけど、どうかしたんですか？」
「ううん。システィが仲良くしているから、私も仲良くなれたらいいなって思うから」
　私としたら友達が増えるのは大歓迎だった。
「かまいませんよ。むしろ大歓迎です」
「うふふ。ありがとう。ステラ」
　こうして友達の輪が広がっていく。私はそのことが幸せに感じた。

「それにしても、この部分がわからないわね……」
「どこですか？」
「ほら。ここよ」
　システィさんの指差した内容は今日の授業で習ったところだった。
「私たちじゃわからないですね……」
「そうだね」
「あの先生に直接聞きに行くしかないってわけね。どこにいるのかしら？」
　今の時間帯、グレンさんがいる場所といったら……想像はつく。
「大丈夫です。場所の把握は出来てますから。この時間ならきっと……」
「わかるの？」
「はい」
「言っておくけど、あいつに私が聞こうって言ったことは内緒だからね！」
「隠すことないのに……」
　私たちはグレンさんがいるであろう場所に移動した。
「やっぱりここにいましたね。グレンさん」
　私たちは屋上に移動すると、私の予想通り、グレンさんはいた。
「お前ら、帰ったんじゃないのか？」
「あ、私達、学院の図書館で板書の写し合いと今日の授業の復習をしていたんですけど、どうしてもわからないところがあるので先生に聞きに行こうって……システィが」
「ちょ、ちょっと!?それは言わないって約束でしょ!?裏切り者ッ！」
「そうでしたっけ？」
「ステラまで……あなたも言うつもりだったのね」
　真っ赤になってシスティさんが怒鳴り立てる。
「ほーう？つまりなんだ？システィーチェ君。まさかまさか、君はこの稀代の名講師、グレン＝レーダス大先生様に何か質問があるとでも言うのかね？んー？」
　うわぁ……めちゃくちゃ腹の立つ顔で言ってるよ……この人にお

世話になってなければきっと殴ってるよ……
「だからアンタにだけは聞きたくなかったのよ！後、私はシスティーナよ！いい加減覚えてよ!?」
「なーんか覚えにくいから、やっぱ、お前は白猫でいいや」
「ああ、もう――っ！」
　とうとうシスティさんは涙目になってしまう。
「先生、今からお時間少しよろしいですか？私もその部分、後で考えてみたら実はよくわかってなくて……」
「ああ、悪かったな、ルミア。俺も今日の授業に関しちゃ少し言葉足らずな所があった気もしたんだ。多分、そこだろ。見せてみな」
「私もわからないので……教えてもらってもいいですか？」
「お前もか。いいぜ。どこがわからないんだ？」
「私とルミアとステラの扱いの差はなんなの…ッ!?」
「ルミアは可愛い。ステラは素直で可愛い。お前は生意気。以上」
「む、ムキィイイイイ――ッ！」
　二人のやり取りを見ていると笑みがこぼれる。
「ステラ。学校は楽しいか？」
　グレンさんと一緒にいたセリカさんに聞かれた。
「はい。最高に楽しいです」
「友達は……出来たようだな。大切にしろよ」
「はい！」
　私はこの学園で通うことで出来た友達を大事にしようと心からそう思った。

欠片

次の日の早朝のこと。

「うぉおおおおおお!? 遅刻、遅刻ぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅッ!?」

どこかで見たような光景が、学院へと続く道中で展開されていた。叫び声の主は言わずもがな、グレンさんである。その後ろを私は遅れないように走っている。

しかも今回ばかりは時計のズレはない。正真正銘の寝坊による遅刻だった。

「ごめんなさい……今日が授業って知らなくて……」

「やけにのんびりしているなって思ってたら、それでか……。伝えなかったやつが悪い！」

私たちは必死に足を動かし、時間に間に合うように走る。

「つーか、なんで休校日にわざわざ授業なぞやんなきゃならんのだ!? だから働きたくなかったんだよっ！」

「前任の方の影響ですよね……しょうがないといったらあれですけど」

本来なら今日は学校は休みなのだが、前任者が抜けている間の授業が遅れていることから、今日は補修という形で学校があった。

私たちは路地裏を通り抜け、表通りを通り、学院への目印となるいつもの十字路に辿り着いた。そのとき、グレンさんが足を止めた。

「きゃっ!?」

私は急に止まったグレンさんにぶつかりそうになったことで小さな声を上げる。

「どうしたんですか？グレンさん」

「おかしくないか？この空気」

私はグレンさんに指摘されてから周りを見る。確かに不自然なまでに誰もいない。早朝とはいえこの時間帯なら、この十字路には行き交う一般市民の姿が少なからずあるはずなのだ。

今日に限っては辺りはしんと静まりかえり、人っ子一人いない。周囲に人の気配すら感じられない。明らかに異常と感じる状況だった。

「いや、そもそもこれは……」
「人払いの結界……ですよね」
　周囲の要所に微かな魔力痕跡を感じるし、間違いなく人払いの結界だった。
「ステラ。俺から絶対に離れるな」
「は、はい！」
　私はグレンさんの服の袖を握る。
「……なんの用だ？」
　グレンさんは静かに威圧するように問う。
「出てきな。そこでこそこそしてんのはバレバレだぜ？」
　グレンさんは十字路のある一角へ、突き刺すように鋭い視線を向けた。
「ほう……わかりましたか？　たかが第三階梯（トレデ）の三流魔術師と聞いていましたが……いやはや、なかなか鋭いじゃありませんか」
　空間が蜃気楼のように揺らぎ、その揺らぎの中から染み出るように男性が現れた。
「グレンさん……この人」
「わかってる。俺から絶対に離れるなよ」
「いえ、そうではなく……」
「アナタ、どうしてそっちを向いているのです？私はこっちですよ？その少女が困ったようにあなたを見てますが……」
「別に」
　グレンさんは気まずそうに男性のほうを向く。
「ええーと、どこのどちら様でございましょうかね？」
「いえいえ、名乗るほどの者ではございません」
「用がないなら、どいてくださいませんかね？俺たちは急いでいるんですけど？」
「ははは、大丈夫大丈夫。急ぐ必要はありませんよ？アナタたちは焦らず、ゆっくりと目的地へとお向かい下さい」
「あのな……話を聞いていたか？急いでるって言ってるだろ」
「いいえ、急ぐ必要はありませんよ。なぜなら……アナタたちの新し

い行き先は……あの世です」
「!?」
《穢れよ・爛れよ・》
男性が詠唱している呪文は致命的な威力を持つ、二つの魔術の複合呪文。それが出来るのは超一流の魔術師である証だった。
まともに直撃していたら、おそらくは死んでいただろう。
＜霧散せよ＞
私は男性が詠唱を終える前にスペル・シールを早口で詠唱し、男性の魔術起動を無効にした。
「……ほう、私の魔術を打ち消しましたか。高速詠唱に加え、周りが良く見えている。素晴らしい状況判断ですね」
私のスペル・シールによって、男性の打ち出そうとしていた魔術は発動しなかった。
「私は詠唱の速さには自信があるんです」
「悪い、ステラ。助かった」
「私はたいしたことはしてません。それよりも……どうやら相手をしなきゃいけないみたいですね」
「面倒だが、そうしないと通してもらえないからな」
「早くおわらせて、学院に向かいましょう。なんだか胸騒ぎがします」
「そうだな」
男性を目にした時から、私の中で嫌な予感が漂っていた。
……それから少し経った後の広場では人々が騒いでいた。
「アイツ、生きてるのか？」
「生きてたとしても、このまま死んだ方が本人にとってマシだろ……」
「酷い……酷過ぎる……見るに耐えられん……！」
「悪魔だ……悪魔の所業だ……」
人だかりの、その中心には一人の男がいた。
全身をボコボコに殴られ、素っ裸にひん剥かれ、亀甲縛りにされ、体中に悪意に満ちた落書き、そして、股に張り紙を張られ、気絶している男がいた。
男性を社会的に抹殺するという意味で広場にオブジェと飾った後、

私たちは急いで学園に向かった。
「くそっ！どうなってる！」
　私たちは何かしらの力が働いている結界により、学院の中に入ることができなかった。
「グ、グレンさん……」
「どうした？」
「警備員さん……息してません……死んでます」
　私は近くに倒れていた警備員を見つけ、状態を確認するが胸に傷跡があり、すでに息はない。
「これは軍用魔術だな。反撃した様子もないし、容赦なく殺されたってところか」
「でしょうね……なんてひどいことを……」
　私は警備員さんの遺体の前で手を合わせ、合掌する
「これは俺たちの手には負えないな。一度、応援を呼びに戻って」
　そのとき、学園の壁をひとつの光が貫いた。
「あれはライトニング・ピアス!?」
　ライトニング・ピアスは軍用魔術と呼ばれ、軍に属する魔導士が使用する戦争用の魔術。それを生徒が扱えるはずはなく、中にいる人物が使用した可能性が高い。
「グレンさん……」
「応援を呼ぶ。ステラ、警備員の詰め所にいくぞ」
「……いやです」
　私は警備員の詰め所にいこうとするグレンさんを止めた。
「俺たちの手におえる相手じゃない。お前だってわかるだろ？」
「わかってます……でも、あそこには私の大事な友達がいます。だから……見捨てることはできません」
　さっきのライトニング・スピアを見る限り、相手は相当の使い手であることはわかった。
「俺たちに何ができるって言うんだよ」
「できます。いや、やらなきゃいけません。今の状況を考えても、助けが来る可能性は低いです。だったら……私たちがやらなきゃいけな

いんです！」
はっきりいうと、私は怖い。グレンさんと同じように逃げたい気持ちもある。
でも……あそこには私を友達と思ってくれる人がいる。受け入れた仲間たちがいる。
初めてできたつながりを私は失いたくない！
「学園は危険かもしれないぞ？」
「それでもやります」
「怪我をするかもしれないぞ？」
「覚悟はできてます」
目の前の大切なものを見逃すことはできない。いくら自分が傷を負うことになっても、必ず助ける。
「わかった。俺がいいって言うまでは俺から離れないこと。何があっても、絶対に無茶はしない。この二つは必ず守ると約束してくれ」
「わかりました」
グレンさんの出した条件に私は深くうなずき、それを見たグレンさんは割符に書かれている呪文を読み上げる。私たちはそろって学園内に入った。
（皆……どうか無事でいて）
私は焦る気持ちを抑えながら、グレンさんの後をついていった。

天の智慧研究会

学園内は休校ということで、静けさが漂っていた。
私たちはまず教室に向かった。人質をとるなら、教室にいる人たちを使う可能性が高い。それがグレンさんの推理だった。
私たちが教室に向かう途中で聞き覚えのある声が聞こえた。
「グレンさん……今の声」
「白猫……だろうな」
聞こえてきた声はシスティさんのものだった。声は悲鳴となって聞こえている。
「グレンさん。あっちから聞こえます！急ぎましょう」
「ああ」
私たちは声がする魔術実験室に急いで向かった。
「ここか」
グレンさんは迷わずドアノブを握り、中に入る。
するとそこには、ニット帽の男がシスティさんに馬乗りしながら、制服を脱がしているところだった。
「すみません、間違えました」
「助けなさいよ！」
グレンさんが扉を閉めようとしたので、私はあわてて、扉を押さえる。
「あー。やっぱりそうなの？そういう胸糞の悪い展開だったの？てっきり、両者合意の上でやってることだと思ったわ」
「んなわけないあるかーッ!?」
「なんだお前らは？」
「一応この学院で講師をやっているものだが、お前、いくらモテないからってそういうの犯罪だぞ？」
「私は学院の生徒ですが……私の友達にそういうことをするのはちょっと早いです。いくら発情したからって駄目なものは駄目です」
そういって、近づいていく私たちに、ニット帽の男はイラつき指を向ける。

「ダメ！先生逃げて！」
「助けろっつったり逃げろっつったりどっちなんだよ」
「ステラも私にかまわず、逃げて！」
「もう遅せーよ。〝ズドン〟！」
　男が私たちのほうに指を向けるが、魔術は発動しなかった。
「はっ？〝ズドン〟！〝ズドン〟！」
　男は何度も魔術を発動しようとするが、魔術は一向に発動する気配を見せなかった。
「もう魔術は発動しねーよ」
　グレンさんはポケットから一枚のカードを取り出す。
「愚者のアルカナのカード？」
「俺はこのカードで変換した魔術式を読み取ることで俺を中心とした一定効果領域内における魔術起動を完全封殺することができる。それが俺の固有魔術、愚者の世界だ」
「固有魔術だと!?てめー、その域に達してるっていうのか!?」
　男は驚き、一歩下がる。私はその間に捕らえられているシスティさんの元に行く。
「大丈夫ですか？」
「う、うん……ありがとう」
　私はシスティさんの両手にかけられるマジックロープをはずした。
「あいつ……こんなすごい魔術を持っていたのね」
「ある意味チートですよね……」
　まぁ、欠点もあるわけで
「まぁ、俺も魔術が使えないけどな」
　グレンさんは舌を出し、にこやかに笑う。
「「は？」」
　さすがの二人も、その言葉を聞き、口を揃えてそう言う。
「いや、だって俺も効果領域内にいるんだからさ」
「そ、それって……ステラも？」
　システィさんに恐る恐る聞かれた。
「ごめんなさい……私もです」

「もうだめだわ……おしまいよ」
　システィさんは絶望したのか、泣き出しそうにしている。
「まだあきらめるのは早いですよ」
「え？」
「グレンさんの強さは魔術だけじゃない。魔術にとらわれない強さがあの人にはありますから」
「小娘が何を信頼しているのか知らないが、魔術師が自分の魔術まで封じてどうすんだよ！お前、さっさとぶへあっ!?」
　グレンさんは男が最後の言葉を言い終える間を与えず、そのまま顔面を殴る。男は鼻血を出しながら、後ろによろめく。
「て、テメー！」
　男はグレンさんに掴み掛ろうとするが、グレンさんはそれを躱し、カウンターのように再び顔を殴る。そして、足を引っかけ、バランスを崩すと、そのまま回転させるように投げ飛ばし、壁に叩き付けた。
「あー。やっぱりなまってるな～」
「ただの運動不足じゃないですか？」
「ステラ……そこはほめるべきじゃないのか？」
「もっと動きがよかったときを知ってますからね……」
　一年間何もしてなければ、さすがに体も衰えるか。
「帝国式軍隊格闘術だと!?テメー……何者だ!?」
「グレン＝レーダス。非常勤講師さ」
「テメーが!?じゃあ、キャレルの奴はやられたって言うのか!?魔術師でありながら、肉弾戦をするような奴に……！」
「そんなに魔術以外で倒されたくないんだったら伝説の超魔術・魔法の鉄拳マジカルパンチでとどめをさしてやるよ。行くぜ！マージーカールー……！」
　グレンさんは拳を握り、飛び上がる。
「パーンチ！」
　パンチではなく、飛び蹴りを食らわせた。
「キックじゃねーか……！」
「キックですよね……」

男はそう言い残し、そのまま地面に倒れる。
「そこら辺がなんとなくマジカル」
「意味がわかりません」
「説明しよう。マジカルパンチというのはだな……」
「あ、そういうのはいいです」
私たちは気絶している男性をロープで縛り、動けない状態で拘束した。
男性の左腕には短剣に巻かれた蛇が絡み付いている模様があった。
学院に来る前に私たちに襲い掛かってきた男性にも、その模様があり、この人たちは天の智慧研究会に所属していることをあらわしていた。
私たちはシスティさんから事情を聞き、ルミアさんがもう一人の男性に連れて行かれたこと、教室に人質となっている生徒がいることを聞いた。
私が状況を整理して、考えをしていると、グレンさんが連絡のついたセリカさんと話していた。
「やっぱり助けはこないですか？」
「今の会話を聞いてたらわかるだろ」
セリカさんと話を終えた、グレンさんに私は助けが来るかと聞くが、助けはこないということがさっきの会話と話しているときのグレンさんの表情でわかった。
私と同じことを思ったのか、システィさんが部屋を出ようとするが、私はシスティさんの腕をつかんだ。
「どこにいくつもりですか？」
「ルミアを助けに行くの！」
「よせ！無駄死にする気か？」
「だって！私…悔しくて…」
システィさんは涙を流しながら、グレンさんに訴える。
「先生の言う通りだった！魔術なんてロクな物じゃなかった！こんなものがあるからルミアが……」
訴えているシスティさんの頭をグレンさんは優しく撫でた。

「ルミアは真の意味で魔術を人の力にしたい。そのために魔術を深く知りたい。そう言ってたぞ。そのためにもこんなところで死なせらんないよな……」
「ルミアさんがそんなことを……」
　ルミアさんも私と同じだったんだ。
「私も魔術で人を導きたい。こんな間違ったやり方じゃなくて、正しいやり方で人の役に立ちたい」
「ステラ……お前」
「だからこんなところで大事な友達を失うわけにはいきません。私たちの目指す未来のためにも……」
　私の目指す道のりに友達を失うなんてルートは作らせない。
「ここからは二手に分かれませんか？」
「俺から離れるなといったはずだが」
「そんなことをいってる状況じゃないでしょ。それに私の固有魔術はグレンさんとの相性が悪いです。一緒にいることで生まれるメリットはないです」
「しかし……」
「大丈夫です。こういうときのために、それなりの鍛錬もこなしてきました。こんなことに使うのは、ほんとはいやだけど、皆を守るためなら……私は戦います」
　魔術で人を傷つけることはしたくないけど……皆が危険な目にあうくらいなら、私は使う。皆を守るために、テロリストたちを倒す。
「ほんと……頑固だよな。ステラ」
「褒め言葉として受け取っておきます」
「俺が駄目って言っても、動きそうだからな。わかった……それでいこう」
　私たちの考えはひとつにまとまった。
「私は教室にいる皆を助けます。グレンさんはルミアさんの救助をお願いします」
「わかった。それと、こいつを持ってけ」
「これは？」

私はグレンさんから宝石の形をした物を受け取る。
「通信機だ。何かあったらこいつで連絡しろ」
「了解しました」
私は通信機を制服のポケットに入れた。
「おい、白猫。お前はステラについてけ」
「先生は一人で大丈夫なんですか？」
「ステラを一人にしておくほうが危険だ。ステラは誰かが見てないとすぐに無茶をするからな」
私の信頼度低くないかな……
「もう少し信頼してもよくありません？」
「そう思うんだったら、すぐに無茶をする性格をなんとかしろ」
「うっ……」
私は正論をつかれると、反論ができなかった。
「いっておくが、イクスティンクション・レイは撃つなよ」
「グレンさんはまともに制御できませんね。私はできますけど」
私たちはそれぞれに切り札としてある魔術をセリカさんから教わっていた。
「うっせ。あんな魔術を作り出すやつが悪いんだよ」
「セリカさんが聞いたら、泣きますよ。弟子が反抗期だ～とかいって」
「あいつならありそうだわ……」
私たちはお互いに笑顔で軽口をたたく。
「無茶はするなよ。ステラ」
「グレンさんも死なないでくださいね」
私たちはお互いに片腕を合わせる。
「システィさん。教室に行きます！ついてきてください」
「う、うん！」
私たちはクラスメイトが人質にとられている教室に向かった。

教室の死闘

教室にたどり着くと、扉には鍵がかかっているのか開かない。
「ロック式の魔術かもですね」
「開けれるの？」
「やってみます」
私は指を口で切ると、血文字で解需の詠唱を唱える。
「終えよ・天鎖・静寂の基底・象理の顎木は此処に開放すべし！」
黒魔儀〈イレイズ〉を唱えると扉のノックは外れ、中に入ることができた。
「システィーナ、ステラ！」
「皆さん、無事ですか！」
教室に私たちが入ってきたことでクラスメイトたちは驚いている。
「ああ。だが、体が拘束されてて、身動きが取れない」
「待っててください。今外しますから」
私は全員の拘束されているマジックテープを外した。
全員が安堵した瞬間、教室の一角から黒い空洞のような物が現れ、そこから短剣を装備した骸骨の群れが現れた。
「コール・ファミリアですね……それも数が多い」
ボーンゴーレムの群れは両手の指を超えるだけの数がいる。
「私たちが逃げようとしたときに発動する仕掛けだったかもしれません」
「ど、どうするんだ!?」
「決まってます。全部倒します」
クラスメイトの皆は後方に下がっていた。教室の机はすべてどかされており、何もない部屋になっていた。
『万象に願う・我が腕に・剛毅なる刃を』
私は『隠す爪』を詠唱すると、地面から細身の剣を出現させた。
「はぁっ！」
骸骨の群れの一体の首元に剣を振りかざすが、剣は強い衝撃音を残しただけで相手を倒すまでにはいたらなかった。

「この連中……硬い！これほど硬いってことは素材は竜の牙か……」
反撃が来る前に私は後方に下がり、体勢を整える。
「あれだと、魔術的なものは通用しない……一発でこの連中をしとめられるものといったら……」
私は自分の中で考えられる最強の魔術をひねり出す。
「イクステンション・レイ。あれしかないか……」
だが、あれを使うにしても、それまでこのボーンゴーレムの群れをどうやって抑える……詠唱しているときに攻撃をされたら意味がない……少しの間だけでいい。あいつらの動きを抑えてくれれば……
そう思っていると、私は一つの考えを思いついた。
「システィさん！」
「な、何？」
私は後方にいるシスティさんに声をかける。
「ゲイル・ブロウを改変することはできますか？」
「できるかもしれないけど……」
「説は3節。効果はできるだけ広範囲で、効果は長めに続くものをお願いします」
「そんな高度なこと……」
「今までの授業をちゃんと理解しているシスティさんならできるはずです！私はシスティさんを信じます！」
優秀なシスティさんならできると思うし、できないとは思いたくない。
「私がこいつらを足止めします。そのうちに作ってください！」
「足止めって……どうやって」
「こうするんです！」
私は剣を地面に置くと、左手をボーンゴーレムのいる方向に向ける。
「光の障壁よ」
座標はボーンゴーレムの群れの中心、サイズはあいつらが納まる程度に設定し、フォース・シールドを張る。
「これも長くはもちません！その間にお願いします！」

「わかった。やってみる！」
ボーンゴーレムの群れはフォース・シールド内に抑え込まれ、ボーンゴーレムたちはシールドを破るために剣でシールドのいたる部分を攻撃を仕掛ける。
「くっ……数が多いときつい」
魔術を連続して使用していることで魔力の消費が激しい。
「なんとか……撃つだけの魔力は残しておかないと」
クラスメイトたちは戦況を見守っている。
「頼みましたよ……システィさん」
優秀なシスティさんならきっと大丈夫。
「うっわ……ボーンゴーレムたちがこっち見てるよ～これ、夜の学校だとしたらかなりホラーだよ～」
ボーンゴーレムたちが剣を振りかざしながら、襲い掛かってくる。夜の学校だとしたらかなりのトラウマものだから。
「できた！ステラ、バリアをといて！」
そんなことを考えていると、システィさんの魔術が完成したらしく、私は待ってましたといわんばかりにバリアを解く。
「拒み続けよ・嵐の壁よ。この下肢に安らぎを！」
私たちの前方を抜きぬける強風は骸骨の群れの進行を抑えている。
「嵐の壁で敵の進行を抑える。見事です」
「でも……全部は」
「上出来です。あとはお任せください」
私は右ポケットから宝石を取り出し、指ではじき、左手でつかむ。
（其は摂理の円環へと帰還せよ・五素は五素に・象と理を紡ぐ縁は乖離せよ）
私が詠唱を始めると、周りがざわめき始まる。
「これが私の必殺技！すべてを吹き飛ばせ！イクステンション・レイ！」
左拳を中心に高速に回転していたリング状の円法陣が前方に拡大していく。
そして3つ並んだリングの中心を貫くように、発射した巨大な光の

衝撃波が前方に突き出している私の左拳から離され、標的のいる場所を一直線に駆け抜けた。
光が晴れると、ボーンゴーレムの群れは存在せず、教室の壁や天井は見事に破壊されていた。
「はぁっ……はぁっ……」
クラスメイトたちは呆然と言う表情で私を見ている。
「きつい……だるい……体が重い」
今のでほとんどの魔力を使い切ったのか、体に力が入らず、後ろのめりに倒れそうになる。
「ステラ、あなた……」
システィさんは倒れそうになる私の体を後方から支える。
「さすがにちょっとしんどいです……」
「マナ欠乏症にはなってないみたいだけど……短時間であれだけ膨大な魔力を使うなんて……」
「あれしかなかったから……しかし、ちょっと無茶をしすぎました……」
体に力が入らない。こりゃ少しやすまないと駄目だ……
システィさんに支えられながら、私は地面に座り込むと、ポケットに入れておいた通信機が鳴っていたから、取り出した。
「お前、今の光はなんだ?あれほど、使うなといったはずだが」
通信の相手はグレンさんのようで、私がイクステンション・レイを使ったことをとがめている。
「ごめんなさい。使うしかなかったんです……」
「また無茶をしやがって……動けるのか?」
「少し休めば何とか……そっちはどうですか?」
自分が思ってる以上に消費が激しいのか、体が重い。
「こっちはテロリストを一人殺した……もう一人は仲間がやったらしい」
「そうですか……私も回復が終われば、そっちに合流します……」
私は立ち上がろうとするが、体に力は入らず、腕はだらんとしている。

「そうか……期待せずにおるわ」
「厳しいですね……いつもですけど」
「厳しくなる理由はわかるだろ」
　その理由は自分が一番わかっている。
「わかってます」
「ならいい。クラスの連中は全員無事か？」
「はい。ルミアさんを除いては全員無事です。あとは……ルミアさんを助けに行くだけですね」
「お前は休んでろ。声を聴く限り、疲労困憊だろうし、おまけに魔力不足のお前がいてもしょうがないからな」
「じゃあ、お言葉に甘えます……そろそろ眠くなってきたので」
「また後でな」
「はい。また後です……」
　そこで通信は切れた。私は通信機から手を離した。
　とりあえず……休んで体力と魔力を回復しなきゃ……それからグレンさんと一緒にルミアさんを助けに行かないと……私は次の行動を考えていると、後ろのめりに体が倒れた。幸いなことに頭は打っていない。
「ステラ！」
「ごめんなさい……そろそろ限界みたいです。少し休んだらまた元気になりますから……」
「俺たちを守るために……」
　男子の声がずいぶん近くに聞こえる。皆、私の近くにいるのかな……
「私たちは仲間です……守るのは当たり前……私はクラスにいる全員と一緒に成長したい……だから私はどんなに自分が傷を負っても、皆を守る。そう決めたんです……」
「ごめんなさい。私たちのために……」
「大丈夫です……死ぬわけではないので……ちょっとだけつかれたので、休ませて……そしたら、また元気に……」
「しゃべらないで！今、回復魔法を！」

「私は……大丈夫……皆が無事でよか……った。あとはルミアさんを……助けにいかない……と」
体がだるいということでしゃべるのもだんだんきつくなってきた。
「誰一人かけちゃだめなんです……皆で一緒に……私の夢は皆さんとともにあるん……ですから」
私の意識はそこで限界を向かえ、意識は体の奥に沈んでいった。

約束

次に私が目を覚ますと、どこかの迷宮にいた。
「ここは……？」
私は確か学校にいたはず……それなのに、どうしてこんなところにいるのだろう。
「やっと起きた……無茶しすぎ」
後方から声がしたから、振り返ってみると。
「ルミア……さん？」
そこにいたのは白い翼を宿しており、ルミアさんにそっくりな少女だった。
「私はあの子とは違うわ」
「で、でも……そっくりですよ？」
「驚くのも無理ないけど……そうね。私の名前はナムル。ルミアじゃないわ」
ルミアさんとそっくりな少女はナムルという名前らしい。
「ステラ、私はあなたを待っていた。やっと会えた……」
「あなたのことは知りません……私は記憶がないので」
「そうね……あなたはそう選んだのだもの」
ナムルさんは私のことを知っている……
「私は一体何をしたんですか？」
「それはあなた自身が知るべきこと。私の口からはいえない」
「知りたければ、自分で調べろ。そういうことですか？」
「そうね。あなたはそういう性格よね」
私は知らないのに、ナムルさんは私のことを知っている。過去に私はこの人と会ったことがあるってことだよね。
「それよりも、私は何でここに？」
「あなたは魔力の使いすぎで倒れたのよ。今は医務室で回復魔法で治療を受けてる」
「皆が……」
はっきりとは覚えてないけど、体がだるいと感じていたのはそのせ

いか……
「それなら早く戻らないと。まだルミアさんを助けてませんから」
「それなら問題ないわ。あなたの信頼する先生がきっとあの子を助けるわ。あせる必要はないわ。もう少し、私と話しましょ」
　グレンさんが向かっているなら、私もいかないと……この人と話している余裕なんてない。
「そんなことをしている時間はありません」
「あせらなくても、大丈夫だといったはず」
「そういう問題じゃないです。私の友達は今も助けを待っている。だったら……私もいかないと……」
「ほんとお人よしよね。自分よりも他人のことを助ける。記憶を失っても変わらないのね……」
　過去の私が今の私と同じだった？
「まだ何も思い出せない？」
「あなたは私のことを知っているんですか？」
「ええ。あなたは……のために選ばれたんだもの」
　ナムルさんの声の一部はとぎれており、よく聞き取れない。
「記憶を失う前のあなたはそれに気づいていた。だから他の人を巻き込まないように、一人でやった。でも……それは失敗だった。あなたは……を守るために自分を犠牲にした。その結果が記憶の喪失よ」
「私は何をするつもりだったんですか？」
　いまだに私の記憶は戻ってこない。記憶の断片すら見つからないという状況だった。
「それは自分で思い出しなさいといいたいけど、いずれあなたに接触してくる組織が教えてくれるかもしれないわね」
「組織？」
「ええ。組織はあなたを必要としている。廃棄皇女と一緒にね」
　廃棄皇女……それは一体誰の事を指しているのだろう。
「ねぇ、ステラ……他人の為に頑張ることがそんなに誇らしい？」
「何が言いたいんですか？」
「今のやり方を貫くと、近い将来、死ぬことになるわよ」

今のやり方が原因で私が死ぬ……
「私としたら、ステラには生きていてほしい。だからやり方を変えなさい」
「それは命令ですか？」
「そう。あなたはこれを拒否することはできない」
拒否したら、私が死ぬことになる。そのことは十分に理解できていた。
「やり方は変えません。私が死ぬ未来も絶対にないです」
「そう……あくまでやり方を変えないというわけね」
「これが私ですから」
「そう。じゃあ、警告するわ。あなたはもっと自分を大切にしなさい。自分を犠牲にして、誰かを救うなんて間違ってる」
「あなたに私の何がわかるっていうんですか……」
まるで自分を否定されたような気持ちになり、私は声を荒げた。
「死ぬことになるわよ？」
「そんな未来は絶対に来ません」
「相変わらず強情な子。まぁ、だからこそ、私はあなたを気に入ったんだけどね」
ナムルさんはその言葉を最後に私の前から消えた。次の瞬間、私の周囲が光に包まれ始め、意識が覚醒し始める。
「ここは……」
私が目を覚ますと、白い天井が見えた。薬のにおいもするから、どうやら医務室のようだ。
「やっと起きた！よかった……」
「ルミア……さん？」
近くには私の手を握っているルミアさんの姿があった。
「ここがどこだかわかる？」
「医務室ですよね。私は教室で倒れて……」
「うん。グレン先生が私を助けた後に、ステラが倒れたから、見てあげてくれっていわれたの」
よく見ると、ルミアさんの目には涙がたまっている。

「ステラの馬鹿！」
「へ……？」
「いくら皆を守るからって自分を犠牲にしたら意味がないでしょ！」
「もしかして……教室でのことを……」
「システィから全部聞いた。ステラがかなり無理してたっていうのもね！」
「で、でも……あそこはあれを使うしかなかったので」
「言い訳をしない！」
「はい……すみません」
　起きてから、早々に説教される私って……
「皆、ステラのことを心配してた。何もできずにステラ一人だけに背負わせちゃったって思う男子もいる……ステラが周りを助けたいと思うように、皆もステラを助けたいって思ってる」
　私は自分が傷を負っても、周りが無事ならそれでいいと思ってた。
　でも……私が傷を負うことで悲しんでいる人もいる。
「ステラが傷つくことで悲しむ人もいる。私やシスティやグレン先生だってそう。今だって、ステラが起きないことで心配しているクラスメイトがいる」
「でも……私にはそれしかできないんです」
「それしかできないなんてことはない！ステラが守ろうとする中には自分が入ってない。だからどんなに痛みを伴っても、私たちを守ろうとする。でも……それは間違い。それでステラが死んじゃったらどうするの？」
「ルミアさん……私は」
　私は自分を守ることなんてしたことがない。いつも他人のことを考えて、自分のことは後回し。ずっとそうしてきたし、それが正しいことだと思ってた。
「もっと自分を大事にして。私はステラと友達でいたい。ステラのことを知りたい。でも、私たちのせいでステラが死んじゃったら意味がない。だからこれからは自分も守って……」
　ルミアさんの言葉で私はようやく自分の間違いに気づいた。

自分を守れない人が他人を守れるわけがない。自分を大切にしない人が他人を守れる資格なんてない。
「ごめんなさい……私は馬鹿です。一人で無茶して、周りに迷惑をかけてしまったようですね……」
「わかってくれた？」
「はい」
私は間違ってた。自分のやり方が正しいと思っていたけど、実は間違いで自分のやり方を通すことで悲しんでいる友達がいる、自分のやり方を貫くことで大事なものを失うところだった。もしかしたら、ナムルさんがいったことはこういうことだったのかもしれない。
「もうこんな無茶はしないって約束しよ」
「約束します。その代わりと言ったらあれですが、ルミアさんも私と約束してもらってもいいですか？」
「何？」
「これから先もずっと……私の友達でいてもらえませんか？」
「もちろんだよ。ステラ」
私たちはそれぞれに約束を交わした、この約束はずっと守っていこう。私はルミアさんと話しながら、そう強く思ったのだった。

一カ月後

事件から一ヶ月が経過すると、学園は何事もなかったかのとおり、平穏を取り戻していた。
「まさか、ルミアが三年前に病死したエルミアナ王女だったとはな」
「ほんと……びっくりですよね……」
私は学園の屋上でセリカさんとグレンさんと一緒にいた。
「おまけに異能者とはな。お陰で事情を知った俺とステラ、白猫は秘密を守るように国から協力要請って名前の脅しを掛けられたよ。面倒なこと押し付けてきやがって」
ルミアさんは異能者だった。異能者とは生まれつき、ごくまれに魔術に依らない奇跡の力を生まれながらに体に現れる特殊能力者のことで、ルミアさんは触れた相手の魔力や魔術を自分の意思で何十倍にも増幅できる感応増幅者だ。
「私は後から聞きましたけど、国からの要請というよりは脅迫でしたよね。逆らうと、この国にいられなくなるぞっていう」
「ほんとそうだよな。だから働きたくないんだよ……」
言葉のとおりで要請というよりは脅迫に近いものだった。
「帝国では、異能者は悪魔の生まれ変わりとして迫害されている。国としちゃ王女がそんな存在だと色々拙いんだろう。胸くそ悪い話だがな」
「大人の事情ってやつですね」
「まぁ、そんなことはどーでもいいさ。アイツはアイツだ。今までと何も変わらねーよ」
「そうですね。ルミアさんがどんな立場であろうと、ルミアさんは私の友達。それは変わらないです」
どんな事情があろうと、ルミアさんが私の友達であることに変わりはない。
「しかし、どういう風の吹き回しだ？本当に講師になると言い出すとは思わなかった。その講師用のローブ似合うじゃないか。先月の事件で今度こそ、お前が魔術にかかわることはなくなると思っていたん

だが……」
　事件の後、グレンさんは正式に学園の講師となった。
「別に……ただ、この間のヒューイって奴が他人事には思えなくてな。ま、自分の人生の失敗を魔術の所為にするのを止めたのさ。少しだけ、前向きに生きてもいいだろうってな。それに」
　グレンさんは私を一目見る。
「この前みたいにまたこいつが無茶をしないように傍で見守るやつが必要だと思ったんだよ」
「この前はごめんなさい……教室を破壊しちゃって……」
「そうしなければならない状況だったんだろ？だったら問題ないさ。誰かを守るために力を使うことは決して間違いじゃない」
　セリカさんは微笑みながら、私の頭をなでる。
「それにステラにはいい勉強になったはずだ。人を守るためには、自分を大事にしなければならないということがな」
「そうですね。私は自分を大事にします」
　今回のことで学んだことは決して忘れない。
　それにしても……あの事件の後、私は夢の中ではナミルさんとは会っていない。過去の私が何をしていたのか、なぜ私が組織に狙われるのか。いろいろと疑問が頭の中を巡っていた。
　正直に言うと、不安はある。この先の自分のあり方に迷うところもある。
「ステラ、どうかしたのか？」
「いいえ。何でもありません」
　不安なことはある。でも、それを言葉にするのはやめよう。いつかきっと本当の自分が見つかる日までは、この悩みは自分の胸の奥にしまっておこう。
「あ、ここにいました！探しましたよ！先生」
　システィさんとルミアさんがやってきた。
「やれやれ、うるせーのがきたな」
「さっきの授業いいたいことがあるんです！」
「あーあ、はいはい」

二人はいつものように口論を始める。
「ステラ。もう体は大丈夫なの？」
「はい、ご心配をおかけしましたが、私はもう大丈夫なので」
私はその場で軽くジャンプし、体が万全な状態に戻ったことを伝えた。
私は事件の後、数日の間、学校を休んだ。事件の後、数日の間は風邪のような症状が出たことから、私はまともに体を動かすことができなかった。
「いいですか!?正式にこの学院の講師になったからには、今まで以上にふさわしい行動が必要になってくるんですからね！大体先生には……」
「説教はそこらへんで……今日はあれをしなくていいですか？」
「ふぇっ!?」
「ふふ。先生、聞いてください。システィったら、先生に助けられたお礼に今、ステラと一緒に……むぐっ」
ルミアさんがすべてを言い切る前にシスティさんが口をふさぐ。
「なんだって、よりにもよってこいつの前で言おうとするのよ!?」
「え～でも、このまま放っておくと、いつまでたっても言い出しそうにないし……」
「そうですよ。決して恥ずかしいことではありませんよ」
システィさんは私たちの言葉を聞くと、真っ赤になる。
「そうだ。今日は勉強としてこの後にケーキを食べに行かない？」
「勉強ですか、それは大事です。今後の予習、復習もかねて、ぜひいきましょう」
これは方便で決して勉強のために行くわけではない。
「くっ……ルミアもステラも……どうせ勉強じゃないでしょ！」
「いえいえ、話題のお菓子を食べるという大事な勉強です」
「それのどこが勉強なのよ……」
「話題を知り、流行に乗っかる。それも大事なことですよ」
「それって大事なことなのかしら？」
「大事です。空気を読むことは何よりも大事ですよ。システィさん」

「空気を読むことって……それって勉強でもなんでもないじゃない！」
　システィさんが難しい顔をしていると、ルミアさんがシスティさんと私の手を握る。
「ほら、早く行こうよ。お店が閉まっちゃう」
「きゃっ！そんなに急がなくても、お店は逃げないわよ！」
「楽しみです。私は甘いものが大好きなので」
　私たちはそろって走り出す。その光景をセリカさんとグレンさんがほほえましそうに見ている。
「変わったな。ステラは」
「ああ。あいつがあんなふうに笑うところは初めて見た」
「あいつはこの先……どんな魔術師を目指していくのかな」
「皆を導ける魔術師になりたいって前に言ってたぞ」
「そうか……あいつなら皆を正しい方向に導いていけるさ」
（それに見てみたくなったんだよな。此奴らが、将来何をやってくれるのか。ステラはどんな風に魔術師たちを導いていくのかを……）
　グレンは成長していく、ステラを見ながら思う。

魔術競技祭

アルザーノ帝国学院は賑わいを見せていた、その理由は一週間後に行われる魔術競技祭に向けて、どのクラスも練習に熱が入っているからだ。

今年はアリシア七世が来賓し、競技祭で優勝したクラスには、女王陛下直々に勲章を賜る栄誉が与えられる。その栄誉を勝ち取るために、どのクラスも本気で優勝を目指していた。

そう……魔術学士二年次二組を除いて。

「飛行競技に出たい人、いませんかー？」

壇上に立ったシスティさんが教室を見渡して呼びかけるが、誰も反応しない。

「じゃあ、変身の種目に出たい人は？」

これにも誰もが反応しない。

「困ったなぁ……これじゃあ、いつまで経っても競技祭の参加メンバーが決まらない……」

「そうですね……一週間後ですし、今日中には決めたいところですが……」

システィさんは頭を掻きながら、黒板の前で書記を務めるルミアさんに目配せする。ルミアさんは一つ頷き、穏やかながら意外によく通る声でクラスの生徒達に呼びかけた。

「ねぇ、皆。折角グレン先生が私たちの好きなようにやっていいって言ったんだし、思い切って頑張ってみない？去年出れなかった人とかは絶好の機会だよ？」

「せっかくのお祭りですし、皆で楽しんだほうがいい思い出になると思いますよ」

私とルミアさんが呼びかけるが、それでも、誰も反応しない。皆が遠慮しているように見えた。

「……無駄だよ、３人とも」

この膠着状態にうんざりした眼鏡の少年が席を立った。彼の名前はギイブル。このクラスではシスティさんに告ぐ優等生だった。

「無駄ってどうしてですか？」
「他のクラスは例年通り、クラスの成績上位人で出場者を固めているんだ。最初から負けると分かっていながら誰が出場したがるっていうんだい？」
魔術競技祭には参加者の出場条件に付いて特に制約はないし、成績上位陣のみで出場者を固めて、優勝を狙いに行くというのは、決して間違いじゃない。
「でも、勝ち負けだけが大切じゃないでしょ？参加することに意義があって……」
「本気で言ってるのかい？今回の競技祭には女王陛下が賓客として御来賓なされる。女王陛下の前で無様な様をさらしたくないのさ。足手まといにお情けの出番を与えるよりも、早く君や僕の様な成績優秀陣でメンバーを固める。それがクラスの為でもあるだろ」
「それだと出場できない人がいますが、その人たちはどうするんですか？」
「彼らには悪いが、僕たちの応援に回ってもらおう。それがクラスのためだ」
彼の言い方はまるで戦力外は必要ないといっているようなものだった。
ギイブル君の言葉にシスティさんは我慢ができず、怒声を上げようとした、次の瞬間、教室の扉は開き、グレンさんがやってきた。
「話は聞かせてもらった！ここは俺、グレン＝レーダス大先生に任せろ！」
講師用のローブを羽織ったグレンさんが突然現れた。
（面倒な人がきた……）
クラスの皆の気持ちが一つになった瞬間だった。
「白猫、競技種目のリストくれ。ルミアは俺が今からいう名前を競技の横に書いてくれ」
グレンさんはリストを見ると、種目ごとに生徒を分けていった。
決闘戦ではシスティさん、ギイブル君、そして私の三人が選ばれた。
「私……ですか？」

「お前に関しては暗号早解きもありだと思ったが、こっちのほうが適任だと思った」
本来なら、一番配点の高い決闘戦に、成績上位三名を選ぶのが妥当だが、グレンさんはウインディさんではなく、私を選んだ。
「で、でも……私、まともに戦えるかどうかもわかりませんし……」
「お前に足りないのは自信だ。この前の戦闘を見ても、お前は強い。だから大丈夫だ」
大丈夫といわれても、不安はある。なにせ、クラスで一番点数が高い種目なんだ。
「お前らもこいつでいいよな？」
グレンさんはクラスの皆に問う。
「まぁ……ステラちゃんなら」
「この前もすごかったし……出るならこれしかないよな」
「納得はいきませんが……ステラさんなら仕方ありませんわね」
クラスの皆は私が出ることに意見はないようだった。
その後もグレンさんは理由を述べた上で生徒たちを競技に振り分けていった。
そして、すべての競技にクラス全員が振り分けられた。
「やれやれ……先生、いい加減にしてくださいませんかね？」
ギイブル君が反論すべく立ち上がった。
「何が全力で勝ちに行く、ですか。そんな編成で勝てるわけないじゃないですか」
「ほう？ギイブルということは、俺が考えた以上に勝てる編成ができるのか？よし、言ってみてくれ」
「そんなの決まってるじゃないですか！成績上位者だけで全種目を固めるんですよ！それが毎年の恒例で、他の全クラスがやってることじゃないですか！」
全クラスがやっていること、それはつまり楽しめない生徒が存在していることだ。
（な、なるほど。生徒を使いまわしていいのか……それなら、ステラを別の競技に持ってくることでも使うことができる。白猫とステラ。

それに優秀なやつを使いまわせば……）
私はグレンさんのほうを見ると、明らかによからぬことを考えていることはすぐにわかった。
「何言ってるの、ギイブル！先生が皆の得手不得手を考えてくれた編成にケチをつけるの！皆も、先生がこんなにも考えてくれてるのに、しり込みするなんてそれこそ無様じゃない！」
システィさんは皆に強く訴えた。
「そうですよ。これが私たちの最高の布陣です。これを崩すなんてありえません！崩したら、それこそ優勝が目指せなくなります」
「大体、成績上位者だけに競わせての勝利なんて、なんの意味があるの？先生は全力で勝ちに行く、先生はこのクラスを優勝に導いてやるって言ってくれたわ！それは、皆でやるからこそ意味があるのよ！」
せっかくのお祭りだし、皆でやったほうが思い出にもなる。
「ですよね、先生!?」
「お、おう……そのとおりだ」
グレンさんは挙動不審に答えた。
クラスの皆もシスティさんの言葉に賛同していき、ギイブル君はクラスの総意だというと、引き下がった。
「ま、せっかく先生がたまにやる気出して、一生懸命考えてくれたみたいですから、私達も精一杯、頑張ってあげるわ。期待しててね、先生」
「お、おぅ……任せたぞ……」
グレンさんは苦笑いを浮かべながら言葉を返す。
「なんかかみ合ってないなぁ……」
「あはは……うまくいくといいですね」
そんな二人を私とルミアさんは苦笑を浮かべながら見ていた。

練習

そして、その日の放課後のこと。私はシスティさんと一緒に決闘戦に向けての練習をしていた。

「大いなる風よ！」

「大気の壁よ！」

システィさんのゲイル・ブロウを私は空気の壁である、エア・スクリーンで防御する。

「雷精の紫電よ！」

お互いにショック・ボルトを詠唱したが、二つの電撃は真正面にぶつかりあい、消滅した。

「くっ……やっぱりステラは詠唱が早い！」

「まだまだいきますよ！『風霊の咆哮』！」

私は学生用の攻撃魔術であるスタンボールの詠唱をした。スタン・ボールは激しい音と衝撃で相手にダメージを与える魔術だ。

「しまっ……」

システィさんはスタン・ボールの衝撃を受け、その場で倒れた。私はあわてて、システィさんの元に駆け寄る。

「ごめんなさい！大丈夫ですか!?」

「このくらいなんてことないわ」

私は倒れているシスティさんに手を伸ばして、起き上がらせる。

「それにしても、相変わらず、状況判断が的確ね。私が次の行動に出る前に、手を撃ってくるんだもの」

「えへへ……私にはこれくらいしかとりえがないので……」

「そんなことないわよ。ステラにはとりえがたくさんある。優しいところとか、真面目なところとか……」

システィさんは頬をかきながら、私の長所をいってくれた。

「ありがとうございます。私、がんばりますから、絶対に優勝しましょう！」

「がんばり過ぎないようにね。ステラの場合は」

「うっ……ほとほどにがんばります」

この前のことがあり、私は無茶をする子というイメージがクラス内に充満していた。
私は頑張りすぎないくらいがちょうどいいんだとよく言われている。
私たちが話していると、中庭のほうでなにやらもめているようなやりとりがみえた。
「グレンさんとハーエイ先生ですね」
「ハーレイ先生よ」
もめているのは、よくグレンさんにいちゃもんをつけている先生で、グレンさんとなにやら口論となっている。
「いってみますか」
「そうね」
私たちは口論が起きている現場に向かった。
「おう、ステラ。練習はもういいのか？」
「なんかもめてるみたいだったので……様子を見にきたんです」
グレンさんの近くに行くと、ハーレイ先生は私を一瞥する。
「ステラ＝フィールド。うわさは聞いているぞ。君もあの魔女のお気に入りだそうだな」
「えっと……魔女というのはセリカさんのことですよね？」
「そうだ。君は相当優秀な生徒だと聞いている」
ハーレイ先生は私とグレンさんを見比べる。
「え、えっと……何か？」
「なるほど。不真面目なグレン＝レーダスと違って、君はちゃんと礼儀をわきまえているようだ」
「ハーエイ先輩。うちのステラに余計なことをいわないでもらえますかね。こいつは人の言うことをすぐに信じちゃうんで」
「ハーレイだ！貴様とは違って、優秀な生徒に声をかけるのことの何が悪い。それに私は悪いことはいっていない。むしろ褒めているつもりだ」
皮肉ばかりで褒められている気がまったくしないのは何故だろう……

「悪いですけど、優勝は俺らのクラスはもらいますよ。なんたって、今年のうちにはこいつがいますから」
グレンさんは私の肩に手を置く。
「あ、あの……グレンさん」
「ハーエイ先輩のいうとおり、こいつは優秀です。おそらく、先輩のクラスの誰よりも」
「ほう……だったら、ステラ＝フィールドをエースとして使うわけか？だが、クラス全員を種目に出すんだろ？だったら無駄な駒を使わずに貴様が信頼する、ステラ＝フィールドで点数を稼げばいいのではないか？」
「ステラはエースじゃない。こいつはジョーカーだ」
グレンさんの言葉に私たちのクラスは唖然としていた。
「ジョーカーだと!?」
「ああ。こいつのことはハー……先輩のクラスもよく知らないはず。ただの転入生。そういう認識ですよね？」
「そうだ。私のクラスは誰もステラ＝フィールドのことは知らない。あくまで転入生という認識だ」
「そうか。やっぱりこいつをジョーカーとして使うことは間違ってなかった」
私がジョーカー？どういう意味だろう……
その後はシスティさんの介入でその場はなんとか収まった。
「あの……グレンさん、私がジョーカーってどういう意味ですか？」
「私も聞きたい」
システィさんと私はグレンさんに尋ねると。
「ハーなんとか先輩のクラスがお前のことを知らないってことは、多分全部のクラスにお前のことは知られてない。あくまで転入生の女子というイメージだ」
「それがどうしてジョーカーなんですか？」
「お前が出る種目は何だ？」
「決闘戦です」
「そうだ。その決闘戦で見たことのない生徒が出てきたとしたら相手

はどうなる？」
「ふつうは戸惑うでしょうね。私もほとんどの生徒は知らないので、同じ条件だとは思いますが……」
「お前の場合は複数の戦い方ができるだろ。相手がワンパターンならいくらでも対応ができる」
うーん。話が全く読めない……
「なるほど。ステラの対応の良さをいかすってことですね」
「そうだ。こいつの得意技もどんな戦法を取るのかも相手は知らない。それに加え、お前はいろんな戦い方をできる。ワンパターンではなく、いろんな戦術を組み合わせることで相手に対策の余地を与えず、お前は事前に相手をじっくりとみることができ、対策も立てられる。例え、相手のことを知らなくても、お前ならすぐに対応できる」
「ステラのことを信頼した上での戦略ですね」
「まぁな。こいつの場合はお前らも知っているとおり、冷静な対応力と高速の詠唱に加え、実力はおりがみつきだし、同じ学年のやつには負けることはないとは思う。ジョーカーっていうのはそういう意味だ。まぁ、お前の場合は切り札っていう意味も込められてるけどな」
クラスのこともそうだけど、グレンさんはちゃんと皆を見ているんだ。
「ありがとうございます。そこまでいわれたら、私は全力でがんばります」
「うん。お前は少し気負いすぎる……もう少しリラックスしろ」
「は、はい。当日にはリラックスした状態で……」
「ごめん、間違えたわ。何も考えるな。お前になんか言うと、逆にスイッチが入りそうで怖い。当日まで無理にがんばろうとするな。」
「あはは……不器用でごめんなさい」
私とグレンさんが仲良く話していると、システィさんがなぜか不機嫌になった。
「ステラ、練習を続けるわよ。時間はあまりないんだから」
「私はもう少しお話したいんですが……」
「駄目よ。時間はないんだから。それにステラばっかりずるいし

……」
「ふぇ？」
「な、なんでもない！」
　私は首をかしげながらも、システィさんの後をついていった。
「なんだ？あいつら」
「きっと羨ましいんですよ。ステラのことが」
「羨ましい？」
「ステラは先生に信頼されて、そこまでの役割を与えてもらったことに対して、システィは何も言われていないから」
「白猫にも一応期待してるぞ。ステラが駄目だったときはギイブルとあいつがなんとかしてくれるっておもってるから」
「それを本人に伝えたらどうですか？」
「伝えたら、ステラのことを信頼してないんですか！って怒りそうだからな」
「あはは……システィならありえそう」
　私たちが去った後、グレンさんとルミアさんが話しているのを見て、私はちょっとだけ羨ましくなった。二人のやり取りが仲のいい兄妹にみえていたから。

前日

大会の前日のこと。私たちは放課後の練習を早めに切り上げると、下校していた。

「まったく信じられない！明日は本番なのよ！それなのに、今日はつかれたから早めに終わる～ですって！まだまだ確認しておきたかったことがあったのに！」

システィさんはいつものようにグレンさんの態度に文句を言っている。

「まぁまぁ……明日に疲れを残さないっていう配慮もあると思うので」

「そうだよ。それにしても、先生、日に日にやつれていってない？」

「そうね。風邪でもひいたのかしら？」

事情を知る人間としては風邪でもなんでもないですといえないのが悲しいところである。

「でも、グレンさんのおかげでクラスの空気はいいですよね」

「珍しくあの先生がやる気になってるからね」

「あんな風に真剣な顔で何かに取り組む先生の横顔って、やっぱり格好いいよね？」

ルミアさんはうれしそうに笑っている。

「……別に？大体、あいつ、普段だらしないんだから、たまにはああして真面目になってくれないと困るわよ」

「ふふ、素直じゃないなぁ」

「……ど、どういう意味よ？」

「時には素直になるのも大事ですよ。素直な自分になることで新しい扉が開かれますから」

「そうだよ。システィもステラみたいに素直になればいいのに」

「私は充分素直でいるとおもうんだけど……」

システィさんもルミアさんもグレンさんのことを好意に思っている。

私ももちろん同じ気持ちなんだけど、私の思いと二人の思いは違う

のかな……
「ステラ、この後って暇？」
「一応開いてますが……どうかしましたか？」
「今日はうちにこない？」
「システィさんの家にですか？でも迷惑なんじゃ……」
「そんなことないわよ。ステラのことは一度、お父様とお母様に紹介したいと思ってたから」
システィさんのご両親は確か官僚を務めていると、前に聞いた。
「で、では……お言葉に甘えます。今日はよろしくお願いしますね」
「ふふ。相変わらず真面目なんだから」
「そうだね」
恐縮している私を見て、システィさんとルミアさんはそれぞれに微笑んでいた。
そして私はシスティさんの家にて
「今日はお世話になります」
「おお。君がステラちゃんか。話は娘からよーく聞いているよ」
私はシスティさんの両親に挨拶した。
「ほんと、あの子にそっくりね」
「あの子って……もしかして私の母ですか？」
「ええ。私たちとあなたのお母さんは友人だったの」
私の母とシスティさんのご両親が友人同士だった……それなら、何か聞けるかもしれない。
「私の母はどんな人でしたか？」
「そうね。自分の正義を信念にすべてを悪を滅ぼすために自分を犠牲にしていた人だったわ」
「お母さんが正義を……」
「君の母上は立派だった。人の鑑として生きていたからな」
私の母も、私と同じように人を導くことを目標としていたのかな……もしも、同じ考えだとしたら、私はうれしい。
「君は確か記憶がなかったんだな……今まで辛かっただろうに」
「そうね。記憶がないってことは自分のことだけじゃない。家族のこ

ともわからないんだもの」
　システィさんのご両親はきっと優しいかたがたなのだろう。こうして他人である私のことも心配してくれるのだから。
「私は大丈夫ですよ。記憶はないですけど、思い出はこれから沢山作れると思うので」
「思いはなくならない。君の母上もよく言っていたよ」
「私の母も……やっぱり考え方は似てるのかもしれません」
　それから、皆で一緒に夕食を食べた。皆で話をしながら食べるご飯はとてもおいしく、とても楽しい時間だった。
（もしかしたら……私もお父さんとお母さんと一緒にこういう感じで過ごしてたのかな）
　まだ小さい私が今日あったことをうれしそうに話し、それを両親は微笑みながら聞いてる。そんなやりとりがあったかもしれない。
（記憶は戻らない……でも思いは残ってる。私は多分両親のことが大好きだったんだ。そして、今の家族のことも大好きだったんだ）
　セリカさんとグレンさんと過ごす日々はとても楽しい。いろんなことがあったけど、二人に出会えてよかったと思っている。
　そして、夕食が終わり、夜が遅いということで、とまらせてもらうことになった。
「すみません……ちょっとだけお邪魔するつもりが、お泊りすることになっちゃって」
「別にいいわよ。それに夜道を女の子を一人では危険だ！ってお父様がいうんだもの」
「うん。私もステラとはいっぱいお話したかったから。とまってくれるのは大歓迎かな」
　私たちは部屋の真ん中に布団を並び、川の字になって寝ている。
　中央が私、右がルミアさん、左がシスティさんという形だ。
「今日はありがとうございました。楽しかったです」
「ふふ。ステラはほんとに謙虚ね。あの先生と一緒に暮らしていると思えない」
「そうですかね？」

「そうだよ。もう少しくだけたしゃべりかたでもいいのに」
くだけたしゃべりかた……うーん。どうやってすればいいんだろう。
「えっと……今日はありがとうね。ルミアさん、システィさん。今日はいっぱい話そうね」
敬語を外し、普通に話すが、二人の反応はいまいちだった。
「なんかごめん……いつものほうがいいかもしれない」
「すごいぎこちないもんね……」
「ごめんなさい。こういう会話に慣れてないので……」
やってみて思った。私はいつものしゃべりかたのほうがあっていると。
「ステラもいってたじゃない。思い出は沢山作れるって。だから徐々に慣れていけばいいのよ」
「うん。ステラはステラなりにね」
私は二人と出会えてよかった。
「これからもよろしくお願いしますね」
その日は夜遅くまで二人と話した。気づいたときには私はすでに眠っていた。
その日の夜はすごくいい夢を見た。大好きな友達と大好きな家族とずっと一緒にいる。そんな幸せな光景が続いていく暖かい夢だった。